
Fate/stay night ~ その時聖杯に願うこと

石・丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / s t a y n i g h t 〽 その時聖杯に願うこと

【Nコード】

N 3 4 9 2 B A

【作者名】

石・丸

【あらすじ】

全てを終え眠りについたセイバー。しかし運命の悪戯か、目覚めた彼女の前に衛宮士郎の姿が。

いつか見た光景に戸惑いながらも、彼女は彼に問いかける。

「——問おう。貴方が、私のマスターか」

聖杯戦争再構成。セイバー逆行もの。

(arcadia様に投稿した作品の加筆、修正verになります)

第一話

「ちょいとばかり驚かされもしたが——もしかしたら、お前が最後のマスターだったのかもな？」

「……マスター？」

薄く靄がかかったような思考の中に声が響く。しかし、そんなものに頓着している暇など私にはない。

何故なら、今まさに彼は“敵”に命を奪われようとしているからだ。

翻る真紅の槍。その切っ先は、真っ直ぐに彼の心臓へと向いている。

逡巡する間などありはしない。私は魔法陣から出るや、彼へと迫る閃光のような一撃を力の限り打ち弾いた。

瞬間、腕に伝わる激しい衝撃。

宝具通しのぶつかり合いは、目も眩むばかりの魔力の発光を促し、その光で薄暗い土蔵が明るくなった。

「——本気が、七人目のサーヴァントだと……!?!」

態勢を整えている暇はない。私はそのまま流れるように踏み込むと、槍を構えた男へ叩き付けるような一撃を放った。

槍を携えた男——ランサーは、手にした槍の腹で一撃を捌くも、衝撃に押され僅かに態勢を崩す。

「チッ——!」

軽く舌打ちをしながら、ランサーが後退する。

それは神速の如き素早さで、ランサーは私が一息も吐かないうちに土蔵の外へと身を躍らせていた。

しかし、これで彼の命を救うという当初の目的は達せられた。

私は油断なく外のランサーを牽制しながら、ゆっくりと背後にいるだろう人物を振り返った。

——覚えている。

とても風の強い日だった。

あの日と同じ月明かりが、まるで銀光のように土蔵へと射し込み、私と目の前で屍餅を付いている少年を照らしている。

「——」

彼は驚いたように呆けながら、声も無く私を見上げていた。

赤茶けた短髪。男性としては低い身の丈。だけど決して華奢ではない。日々の鍛錬の賜物なのだろう。全身あますところなく鍛えられていて逞しい。

私はその力強さを知っている。

彼のやさしさ、暖かい温もりも知っている。そして、余人では背負いきれないだろう彼の理想も。

思えば無茶ばかりしていた。いつも傷ついて、それでも決して倒れなかった。理想の重さに潰されそうになりながらも、走りつづけた。

そんな彼を、いつしか愛おしいと思うようになって——
声を荒げて喧嘩をしたこともある。

互い互いを想い、それでも曲げることの出来ない思いからぶつかったのだ。あの夕焼けた世界の中で彼の在り方を罵倒し、そんな私に対して彼はもう知らないとはかりに走り去って行く。

薄く滲んだ視界の中で、だんだんと小さくなっていく彼の背中。遠くにいくにつれて心に広がった小さな波紋。

辛かった。心が痛かった。

けれど、彼も辛かったに違いない。心が痛かったに違いない。それでも彼は私を迎えに来てくれたのだ。

あの時の手の温もりを、私は忘れることはないだろう。

「――」

シロウト、そう呼んだら彼はどんな顔をするのだろうか？

言葉もなく、ただ私を見上げている彼。

やはり驚くだろうか。

けれど、今、私が言すべき言葉は決まっていた。私は、言葉に万感の想いを乗せて――

『――問おう。貴方が、私のマスターか』

そつと、それだけを口にした。

「え……マス……ター……？」

彼はオウム返しに問われた言葉を口にする。

私が何者なのか、今現在何が起きているのかが判らずに、混乱をきたしているのだろう。

でも私は知っている。貴方が何者なのかを。

「サーヴァント・セイバー。召喚に従い参上した。マスター、指示

を」

私の声を耳にした瞬間、彼が左手の甲を押さえながら苦痛に顔を歪める。

そう“令呪”が現れたのだ。

サーヴァントとマスター。

令呪が異なった存在である私達を繋ぐ。私にとって唯一のマスターである貴方と。

「これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある――

――ここに、契約は完了した」

「け、契約って、なんのっ!？」

今は説明している時間はない。外にはランサーが控えているのだ。私は彼に背を向けるや魔力を脚に乗せ、土蔵の外へと身を躍らせた。

「やめっ――!」

やめる。そう言おうとしたのだろう。その彼の声を背中に受けながら、出会いがしらにランサーへ聖剣を叩き付ける。

土蔵から飛び出た瞬間、待ち構えていたランサーとぶつかったのだ。

互いの宝具が相手を仕留めるべく翻る。私は振るう一撃に魔力を込め、爆発させた。

ランサーと私にはかなりの体格差があるが、そんなものは溢れる魔力で埋めてみせる。

「はあっッ!!」

上段から袈裟斬りに振り下ろす。その一撃を槍の腹で受け止めたものの、魔力爆散の影響でランサーが後退した。

間合いが開く——だが、攻撃の手を緩めるわけにはいかない。

私は彼の後を追撃するや、縦横無尽、連撃を火のように加えていく。それらの一撃をランサーが受ける度に、激しい剣戟の音と併せて火花のような閃光が散った。

「ぐっ……卑怯者め。自らの武器を隠すとは何事か——!!」

苦虫を嚙潰したような表情でランサーが悪態を吐く。

さしものランサーも、この武器相手ではやりにくいとみえる。

何せ私の持つ剣は相手の視界に映らない。文字通り見えないのだから。

——ならば、押し込む。

聖剣を下段に構えたまま肩から突進し、迫る紅撃を打ち上げた。そして、返す刃で空いた空間に一撃を放つ。

「てめえ……!!」

ランサーが更に後退するのに合わせ更に押し込んでいく。

激しく散る魔力の飛沫に合わせて剣舞のように続く連撃。それでもランサーは私の全ての攻撃を防ぎきっていた。

初見で、しかも見えない武器相手だというのによくやるものだと感心する。

だが防御に徹して防ぎきれるほど私の攻撃は甘くない。

彼が守るなら、その守りごと撃ち砕く。

私は渾身の力を両腕に込めて、相手のガードごと打ち砕くべく聖剣を振り上げた。

だが……

「調子に乗るな、たわけッ——！」

聖剣を振り下ろすのと同時に、視界からランサーが消え失せる。

「ち……！」

見失った敵の気配を直感を頼りに探り当てる。

彼は一旦後方へと飛び退り、着地と同時に弾けるようにして舞い戻って来ていた。

しかし、相手の行動が読めても私の体勢は崩れたままだ。振り下ろした聖剣は未だ地面を撃ち据えたままであり、敵であるランサーが眼前に迫っている。

ここが勝機とばかりに、必殺の一撃を繰り出すランサー。

しかし、私とてセイバーの名を冠するサーヴァントだ。

迫る一撃を円を描くようにして避けると、そのまま相手の脇腹に向かって聖剣を走らせて——

「ぐう——ッ——！」

「ぬう——っ——！」

激しい衝撃が両腕から全身へと伝わっていく。

渾身の一撃は互いの武器を打つに留まったようだ。そして、その勢いで私とランサーの間合いが大きく開く。

一瞬の静寂。

離れた間合いの中でランサーは槍を構え、じっと私を睨み据えていた。

「どうした、ランサー？ 止まっていたのは槍兵の名が泣こう。それとも私から行った方がいいかな」

「ハッ！ わざわざ死にに来るか。それは構わんが、その前に一つだけ訊かせる。貴様の宝具——それは剣か？」

ランサーを射抜くように見つめる。

あの時と“同じ”問い。ならば此度の私の答えも決まっている。

「さあ、どうかな。戦斧かも知れぬし槍剣かも知れぬ。いや、もしかしたら弓かも知れんぞ、ランサー？」

私の答えを受けて、ランサーは面白そうに口端を歪め

「——はっ。ぬかせ、剣使い」

と言い放った。

次いでランサーは、僅かに槍の穂先を下げ、もう一度だけ口を開く。

「……ついでにもう一つ訊くが、お互い初見だしよ、ここらで分けて気はないか？」

私を視界に納めたまま、ランサーが私の後方へと気配を向ける。

そこには、いつの間に土蔵から出てきたのか、私のマスターたる彼が呆然と佇んでいた。

「悪い話じゃないだろ？ ほら、あそこで惚けているお前のマスターは使い物にならんし、俺のマスターとて臆病者でね。イレギュラーな事態が起きたなら帰って来いとぬかしやがる。ここはお互い

万全の状態になるまで勝負を持ち越した方が好ましいんだが……」

月明かりを全身に浴びながら、ランサーが私の答えを待っている。その間に私は、視線だけを動かして自身のマスターを捉えた。

彼は心配そうに私のことを見つめている。

先程まで自身が殺されかけていたにもかかわらず、私のことを案じているのだ。

本当に彼らしい。

私はほつつと小さく息を吐いてから、改めてランサーに視線を戻した。

「良いだろう、ランサー。その提案を受けることにする。今宵は——ここまでとしよう」

「ほう、以外に融通が利くじゃねえか。セイバーなんてどいつも堅物だと思っていたが。いや、助かったぜ」

先に私が剣を下げたのを見届けてからランサーも槍を下げた。

と思つたのも束の間、僅か一足で広い衛宮の庭の隅まで移動する。

「じゃあな。次に会う時を楽しみにしてるぜ、セイバー」

それが最後の言葉。

青き槍兵は、身軽に塀を乗り越えて夜の闇に消えて行つた。

ランサーを見送ってから聖剣の存在を掌から消す。それを待つていたかのようなタイミングで、背後から駆け寄ってくる乱雑な足音が耳に届いた。

「——なんで」

足音は私の側で止まる。

それを確認してから、私はゆっくりと己がマスターを視界に納める為に振り返った。

——シロウ。

彼は私に声をかけようとして口を開こうとするが、まだ混乱しているのか、言葉を出さずに閉じる。そんな行為を繰り返していた。

……ああ。これは奇跡なのだろうか。

私の目の前に彼が、シロウがいる。

あの激闘の後、確かに別れた私の半身。もう会えないと、せめて夢の中でならと眠りについたはずなのに……彼が、今まさに私の目の前にいるのだ。

思わず彼に手を伸ばしてしまう。それにあわせて身に纏った鎧が軽い金属音を奏でた。

その音に驚いたのだろうか、彼が半歩だけ後ろに下がる。

——いけない。

私は何をしているんだ？　こんなことをしてもただ単に彼を驚かせるだけなのに……。

そう思ったものの、一度動き出した想いは止まらなかった。

駄目だ、やめろ——！

心の声に反して身体が動く。

半歩下がった彼に離されないように、一歩だけ近づいた。今度は

彼も動かない。

そして、視線が逢った。

掌が彼の頬を抱くように伸びて——気がついてみれば、私は彼をきつく抱き締めていた。ゆっくりと伸ばされた腕が彼の背中へと廻っている。

ああ、シロウが私の腕の中にいる。

シロウが、シロウが、シロウが——私の腕の中にいるのだ。

それは永遠とも思える時間。私は月光をその身に浴びながら、彼の胸に顔を埋めその温もりを感じていた。

音の無い静寂の中。密着した身体から彼の動きが伝わってくる。もしかしたら、私は震えていたのかもしれない。彼はそっと私の肩に手を置いてから、落ち着いた声で

「——なんで、泣いてる？」

はっと、彼を見上げた。間近で視線が絡み合う。

そして気付く。頬を伝う熱さに。

私は……泣いているのか？

これじゃいけないと、私は慌てて彼から腕を離し背中を向けた。それから右腕で目元を覆ってから、改めて彼に向き直る。

今度は強く自分を律しながら。

その行為で場に緊張感が戻ってきた。彼は私の変化に戸惑いながらも疑問を口にする。

「——おまえ……何者だ？」

「何者もなにも、セイバーのサーヴァントです。シ……貴方が私を呼び出したのですから、確認するまでもないでしょう」

「セイバーの……サーヴァント……？」

何を考えているのだろう。彼の目が驚きに見開かれている。

「はい。ですから、私の事はセイバーと」

——そう、呼んでください。

「そ、そうか。セイバーだなんてヘンな名前だな……」

彼はそわそわと地面に視線を落としたり、私を横目で盗み見たりしながら、最後にぶっきらぼうにこう付け加える。

「お、俺は士郎。衛宮士郎っていつてこの家の人間だ」

シロウ。そう、貴方の名前はエミヤシロウ。魂にまで刻まれている、永遠に忘れ得ぬ愛する人の名前。

だが、じっと見つめる私の視線を勘違いしたのか、彼が慌てたように両手を振った。

「いや、違う。今のはナシだ。訊きたいことはそういう事でなくてだな、つまり……」

「知っています。貴方は正規のマスターではないのでしょうか？」

「え……？」

「しかし、それでも貴方は私のマスターです。契約を交わした以上貴方を裏切りはしない。そのように警戒する必要はありません」

「い、今……なんて？ マスター？」

話にまったく付いていけないのだろう。シロウが口籠もっているのが分かる。

けれど無理もない。命を狙われて、死にそうになって、窮地を助けてくれたとはいえ私は見も知らない不審者なのだ。すんなりと事態を受け入れる方がおかしい。

「ち、違うぞ。俺マスターなんて名前じゃない」

「それでは、シロウと。ええ、私としてはこの発音の方が好ましい」
「なっ……………っ!!」

彼の顔が赤くなったのが分かった。

名前を呼ばれたのが恥ずかしかったのだろうか。何だか、そういう仕草は見ていて微笑ましく思える。

「ちょっと待って！ 何だってそっちの方を……………て、痛っ——
—なんだ、これ。あ、熱くなってる……………！」

信じられない物を見つけたとばかりに、シロウが左手の甲を凝視している。

確認しなくても分かる。そこには刺青のような紋様が刻まれているはずだ。

「それは令呪と呼ばれるものです。私達サーヴァントを律する三つの命令権でありマスターとしての命でもある。無闇な使用は避けてください、シロウ」

「セ、セイバー？」

「シロウ。外に……………」

一瞬、口籠もる。

敵——そう、今は“まだ敵”のはずだ。

「外に敵が二人います。この程度の重圧ならば問題ない相手ですが、放っておく訳にはいかないでしょう」

「……外に敵だって？　ちょっと待て。おまえまだ戦うつていうのか！？」

「向かってくるのなら応戦はします。とりあえず外に出ませんか、シロウ」

こうして私は、想像すらしていなかった、自身三度目となる聖杯戦争に身を投じることになったのだ。

第二話

屋敷から出た私達を待ち受けていたのか、十メートル程の距離を挟んで二人の人物と対面することになった。

青年と少女のペア。

勿論、今の私は彼等が何者であるかを知っている。

真紅の外套を纏った青年は、私と同じくサーヴァント。クラスはアーチャーだ。前回の聖杯戦争の折り、彼は“この場”で負傷し、以降は傷の回復を優先した為あまり私との接触は無かった。

故に彼に関しての情報はあまり持ち得ていない。

短く刈り込まれた白髪。ランサーにも負けない長身。無駄な鍛えられ方は一切していないのだろう。褐色の肌と相まって彼を見る者に精悍な印象を抱かせる。

何処か懐かしい雰囲気を漂わせる武人。私はそう感じていた。

もしかしたら、生前は私と縁のあった騎士だったのかもしれない。敵だったのか味方だったのか定かではないけれど、彼とてサーヴァント。英霊であり英雄なのだ。

だからなのだろうか。アーチャーは私のことを驚いたような視線で見つめている。

そして、彼の側にいる少女が、アーチャーのマスターである遠坂凛。

五大元素使いと呼ばれる卓越した魔術師であり、聖杯戦争のマスターとしての資質の高いレベルで兼ね備えている。明朗快活な性格で、とても気持ちの良い少女だ。

私は彼女のことをとても気に入っている。

しかし現状を鑑みて“敵対”する可能性がない訳ではない。いや、以前は私がアーチャーを切り伏せた為に共闘したが、今回は彼が健在なのだ。基本的に聖杯戦争は七組のマスターとサーヴァントによ

るサバイバルゲーム。

今すぐにでも戦いに発展することだってあり得る。

私はアーチャーを牽制する為に一歩だけ前に出た。手には再び現した聖剣を握り込んでいる。

「――マスター、指示を」

アーチャーは帯剣こそしていないものの、マスターを守るような位置に身を置き私を見据えていた。彼の後ろにいる凜は、静かに事態の推移を見守っている様子だが、正直に言えば戦いたくない相手ではある。

「……止めてくれ、セイバー。正直に言って俺はまったく事態に付いていけない。それに、おまえが敵って呼んだあいつ――俺の知ってる奴なんだ。そいつを襲わせるなんて出来ない」

やはり、彼ならそう言うと思った。
だが……。

「シロウ。彼女はアーチャーのマスターだ。今はまだ私達の敵なのです」

「そんな事は知らない。だいたいマスターだサーヴァントだって、俺には全然解らないんだ。理解して欲しいなら説明するのが筋じゃないのか？」

「それは……そうですが」

そのやり取りを聞いていたのだろう。

アーチャーを押し退けるようにして彼女が前に出てきた。

「ふうん。つまりそういうコトなんだ。へえ……素人のマスターね」

鈴を転がすような響きの良い声音。

シロウは、前に出てきた彼女を驚愕の表情で見つめながら、その名前を呟いた。

「遠坂——凜」

「あら？ 私のこと知ってるんだ。なあんだ。なら話しは早いわよね、衛宮くん？」

「な……」

場にそぐわない明るい口調に、一触即発の雰囲気が一気に軟化する。

私ですら拍子抜けしてしまう程なのだ。シロウなんて金魚みたいに口をパクパクさせて目を丸くしている。

そんな彼の様子は、少し、可笑しかった。

「知ってるって……そりやおまえ学園の有名人だし……じゃなくてっ！ 遠坂、おまえは……！」

「そう。貴方と“同じ”マスターよ。つまりは魔術師ってことになるわね。あなたも魔術師なんだし隠す必要もないでしょう？」

「ま、魔術師だってっ？ 遠坂、おまえ、魔術師なのか……！？」

シロウの言葉を受けて、彼女の柳眉が不機嫌そうに寄った。それに危機感を感じたのか、シロウが慌てて弁解を始める。

「あ、いや、違うんだ。俺の言いたいことはそういうことじゃなくてだな……つまり……」

「……そう。色々と納得いったわ」

彼女は思い切り嘆息してから、背後に控えるアーチャーを振り仰

いだ。

「アーチャー。悪いけどしばらく消えててくれるかしら。私、ちょっと頭にきたから」

「……解らないな、凜。頭にきたとはどういうことだ？」

「言葉通りの意味よ。アイツに現状を、自分の立場を思い知らせてやらないと気がすまなくなったの。貴方がいたらセイバーだって剣を収められないでしょ？」

「確かに。敵であるサーヴァントを前にしては、悠長に話し込んで無理はないだろう」

「でしょ？」

「ふう。君にも困ったものだ。言い出したら聞かないのは分かっただけだが……命令とあれば従うしかあるまい。だが、一つ忠告すれば、それは余分な事だと私は思うがね」

やれやれと苦笑しながらも、アーチャーは彼女の言う通りにその存在を消していく。霊体であるサーヴァントは、姿を消しマスターの傍に控えることができるのだ。

その光景——アーチャーが消える様子を間近で垣間見たシロウは、驚愕のあまりか身体が硬直している。そんなシロウの様子など気にならないとばかりに、凜はシロウの真横を通り過ぎつつ衛宮の家に向かって歩み始めた。

「話しは中でしたしよ。どうせ何も解ってないんでしょ、衛宮くんは。安心してね。嫌だって言っても全部教えてあげるから」

「待て遠坂っ！ 勝手に話進めて——一体なに考えてんだ、おまえ……は……！」

凜の理不尽な行動に業腹したのか、シロウが彼女の肩を取って歩みを止める。けれど、振り向いた彼女の表情を見て、どうやら氷つ

いてしまったようだ。

何故なら、彼女は先程までの笑顔とは違うまったく別の表情をしていたから。

「衛宮くん？ 突然の事態に戸惑うのは分かるけれど、素直にその事態を認めないと命取りって時もあるの。ちなみに、い・ま・が！ その時だって分かって？」

「だ……だけど……」

「——死にたいのかしら、衛宮くんは？」

「……………」

「はい、分かればよろしい」

シロウの沈黙を肯定と受け取った凜に笑顔が戻る。それから、改めて私の方へと視線を向けてきた。

「それじゃ行きましょうか。貴女もそれでいいでしょセイバー？ 貴女のマスターに色々と教えてあげるんだから」

確かに、私が説明するよりも凜が説明する方がシロウには理解しやすいだろう。それに、今はまだシロウと顔を合わせて冷静でいられる自信もない。

私とて突然の事態に動揺しているのだ。

「はい。貴方がマスターの助けになる限りは控えています」

私と凜。並んで衛宮家の門をくぐる。

その場に一人取り残された彼は

「なんでさ。なんであんなに怒ってるんだ、あいつ……」

と、しばらく呆然と佇んでいた。

『——“Minuten vor Schweiben”……』

凜の呪を詠む声が衛宮家の居間に響いている。その効果を受け、畳の上に散乱していたガラスの破片が組み合わせり、復元を開始した。

一連の光景を呆然と見つめているシロウ。

同じ魔術師でも凜とシロウでは方向性が違う。

「——凄いな、遠坂。俺にはそんなこと出来ないから、直してくれて感謝するよ」

「え？ 出来ないって……そんなことないでしょ？ こんな魔術の初歩の初歩じゃない。ドコの学派でも同じでしょ？」

「そうなのか。けど俺は正式に教わった事がないから、基本とか初歩とか知らないんだ」

ピタリと、凜の動きが止まった。

あれは予想外の出来事に戸惑っているのではなく、何故だかわからない怒りを押し殺しているのだろう。

「……ちよつと待つて。じゃあなに、衛宮くんは自分の工房の管理も出来ない半人前ってことかしら？」

「工房？ そんなの持つてないぞ、俺」

「……えつと、なに？ じゃあ、本当に貴方、素人？」

「そんな事ないぞ。強化の魔術くらいは使える」

「強化つて、また随分と半端なのを使うのね。で、それ以外はから

つきし駄目なワケ？」

おう、と横柄に頷くシロウ。

これは……そろそろ“きそう”ですね。

危険を感じ取った私は、凜とシロウから少し距離を取った。

そしてやはり

「——な、なんだってこんなヤツに、セイバーが呼び出せるのよおおっツーーーーー！」

夜の深山に、凜の嘆きにも似た絶叫が響き渡った。

聖杯戦争とは、どのような願いでも叶える万能の器——聖杯を巡ったサバイバル・ゲームである。

マスターとは等しく魔術師であり、彼等が聖杯の助けを借りて呼び出されるのがサーヴァントと呼ばれる英霊達だ。マスターはサーヴァントを使って他のマスターを駆逐し、聖杯を得るのが目的となる。

そこで行われるのは、文字通りの殺し合い。

「私が教えてあげられるのは、貴方がもうマスターで戦うしかないってことなの。サーヴァントは強力な使い魔だからうまく使いなさいってことだけよ」

凜の説明は淀みがなく、整然としていて解りやすい。

聖杯戦争に対して何の知識もないシロウでも、よく理解できるような丁寧な説明だった。

「それが聖杯戦争という儀式のルール。貴方が選ばれたものの本質なの」

衛宮の家に私とシロウ、それに凜がいる。状況こそ違えど、こうして三人でいる空間にとても懐かしいものを感じた。

あの時は聖杯戦争に勝つことばかり考えて、この雰囲気を楽しむ余裕はなかったけれど、改めてこの場所を鑑みればとても暖かいものを無碍に放り出していたのだと実感する。

「それに衛宮くんだって、本当のところは理解しているんじゃない？　だって、一度ならず二度までもサーヴァントに殺されかけたんだから」

「……………」

「ああ、殺されかけた——じゃないわね。だって衛宮くん。学校で実際に殺されたんだもの」

淡々と続いていく凜の説明に、シロウも自身の置かれた立場を理解し始めたようだ。

しかし、凜の思わぬ言葉呼び水に、シロウが疑問の声を差し挟む。

「ちょっと待ってくれ。遠坂、俺がランサーに殺された事を知っているのか？」

「——ッ！？　やば……少し調子に乗りすぎたか」

目を見開いて驚き、自分の失言を後悔する凜。

シロウは“どうしてその事実を彼女が知っているのか”それが気になったのだろう。しかし凜は、そんなシロウの疑問をキッパリと否定した。

「……ただの推測よ。つまんない事だから忘れなさい、衛宮くん」
「つまんない事じゃないぞ。俺はあの時、確かに命を助けられた。
本当なら死んでいたところを“誰か”に助けられたんだ。それを知
ってるってことは――」

「いいからっ！ そんな事より今はもつと知らなきゃいけない事があるでしょっ！」

無理やりに話しを捻じ切って凜が説明を再開する。その剣幕に押されたのか、シロウも不承不承ながら話しの続きを聞くことにしたようだ。

それからしばらく、二人のやり取りだけが続いていく。そして、話が一段落したところで凜が立ち上がった。

「さあて、話しも纏まったところで、そろそろ行きましようか」

「ん？ 行くって何処へさ？」

「もちろん、貴方が巻き込まれた“聖杯戦争”をよく知っているヤツに会いに行くのよ」

「え？ こ、こんな時間からかつ！？」

シロウが時計で時刻を確認している。

説明を開始してからかなり時間も経っている。もう深夜といって良い時間帯だった。

「そうよ。今からでも急げば夜明けまでには戻ってこれるんじゃないかしら。明日は休日だし、別に夜更かししても問題ないわよね？」

「いや、そういう問題じゃなくってだな……」

シロウがチラチラと私に視線を送っているのが分かる。
言っべきか、言っまいか。

しかし逡巡はさほど続かず、彼は困ったように嘆息してから口を開いた。

「……だいたいセイバーが困るだろ？ セイバーって昔の英雄なんだろ？ なら現代のことなんて分らないことだらけのはずで、そこから説明するのが筋じゃないか。違うか、遠坂？」

ああ、そういう事ですかシロウ。
私は一度大きく頷いてから

「いいえ、シロウ。私達サーヴァントは人間の世であるのなら、あらゆる時代に適応します。ですからこの時代のこともよく知っている。それに、この時代に呼び出されたのは初めてではありませんから」

「なっ——！？」

「嘘……？ どんな確率よ、それ……！？」

二人が絶句している。

そう。私がこの時代に来るのは“三度目”だ。

「初めてじゃないって、本当か、セイバー？」

「ええ。その通りです、シロウ」

本来なら二度とあるはずのない奇跡。

暁に彩られた世界で、別れを告げたはずの貴方に出会えた奇跡。

「……セイバー、おまえ……」

「じゃあ、問題ないワケね、衛宮くん」

彼の声を掻き消すタイミングで凜が声を挟む。その為にシロウが

何と言ったのか正確には聞きとれなかった。彼も大した用件ではなかったのか、不満の色を滲ませながら凜の方へと顔を向けてしまう。

「分かった。行けばいいんだろ、行けば。それで何処に行こうってんだ遠坂？」

「隣町にある教会よ。そこにこの聖杯戦争を監督してるヤツが居るのよ」

「監督……？」

「そ。行けば分かるわよ」

凜が不敵な笑みを浮かべ、じーっとシロウを見つめていた。あれは何も知らないシロウを振り回して楽しもうという表情ですね。

今度私もやってみましょうか。

その表情から何かを感じ取ったのか、シロウは怯えたように凜からそつと視線を逸らしていた。

夜の冬木の街をシロウと凜と共に歩く。

時刻は深夜。寒く冷たい空気と相まってか、出歩いている人影は私達以外には見当たらない。明るい月の光だけが私達を照らしている。静寂に満ちた世界。

それでも彼は用心の為にと――

……はあ。

半ば予想はしていましたが“また”これを着ることになるなんて。

鎧を脱がないと言う私に、シロウが用意したのはいつかの黄色いレインコート。思わず抗議の意味を込めて無言になってみたりもしましたが、果たしてシロウに如何ほどの効果があるのか。

じーと視線で圧力でもかけてみましょうか。

「こっちから行こう」

「え？ 何処に行くのよ衛宮くん？ そっち、道が違っわよ」

「隣街に行くんだろ？ ならこっちから橋を通った方が近道だ」

任せろというシロウの言葉を受けて、川沿いにある公園を目指して歩いている。

公園から橋を渡って新都に行こうというのだ。

「へえ、こんな道があつたんだ。そっか、新都には橋から行けるんだから公園を目指せばいいのよね」

公園に着いた途端、凜が辺りを見回しながら弾んだ声を上げている。その声に釣られた訳ではないが、私も辺りを窺ってみた。

深夜、私の視界に映る公園は、何時か見た光景を思い出させる。

そうだ。私はこの場所で——自身の半身を見つけたのだ。

忘れようとしても、忘れることは出来ない。

あの時、彼に手を引かれ家路に着こうとした時に突然現れた災厄。想像すらしなかった第八のサーヴァント出現。

『待たせたな、セイバー。約束通りこうして迎えに来てやったぞ』

頷くわけにはいかない。

結果として戦うことになった私は——

『いいだろう。では——力ずくだ』

襲いくるエアの咆哮。

あの黄金のサーヴァントとの死闘に私は——敗れたのだ。

まるでゴミ屑のように撃ち捨てられてもどうすることも出来ない。それほど圧倒的な力の差がギルガメッシュと私の間にはあったのだ。

——悔しかった。

——自分が情けなくて泣きそうだった。

だって、私が倒れるということは、シロウを守れないということなのだから。

そんな彼もまた、ギルガメッシュの凶刃に倒れ、真っ赤な血の海で沈んだ。

敵うはずもないのに。届くはずもないのに。シロウは“私を失わない”為に戦ってくれたのだ。その行為に私は恐怖した。切なくて心が碎けるかと思った。だって、私は、私が消えることよりもシロウがいなくなる方が嫌だったのだ。

瞳を閉じればあの時の光景が鮮明に蘇ってくる。

視界は血で赤く染まり、声はか細く、それでも必死になって叫んだ。

『もう無理だと、どうして判らないのです……！』

私の声を振り払い、傷ついて、血まみれになって、死にそうに呻きながらも、それでも戦おうとした。

『いらないっ！ 貴方の助けなどいりませんっ！ 私は……既に貴方の剣ではないんです……！』

彼は流れ出る鮮血もお構いなしに、絶望ともいえる相手に突き進んでいた。

『やだ、止めてくださいシロウ！ それ以上はダメだ……！ 本当

に、本当に死んでしまう。こんな、こんな事で貴方に死なれたら、私は――」

罵倒しても、懇願しても、哀願しても、彼はその歩みを止めよう
としない。
うるさいと。黙ってろつと。そうしないと大事なものを失うから
と。

『俺には、セイバー以上に欲しいものなんて、ない――』

シロウの心を感じる暖かい言葉だった。

そして激闘は、一つの“奇跡”によってその幕を閉じる。
その末に辿り着いた一つの真実。

――やっと気づいた。シロウは、私の鞘だったのですね。

「――」

冷たい冬の木枯らしが、そつと頬を撫でていく。

私はゆっくりと目を開いてから視界に彼の姿を捜した。

当のシロウは、私の少し先を歩いていたが距離が開いたのに気付いたのだろう。立ち止まって私を振り返っている。

「いいから、もう行くぞ。別に遊びに来たわけじゃないんだから」

叫ぶ彼の後を小走りに追った。

橋を越えれば新都へ至る。とはいえ目的の教会まではまだ少し時間がかかるだろう。

なら、少しだけ、あの時のことを思い出していよう。幸いフードに隠れて、私の顔は二人には見えないのだから。

第三話

「これは……凄いな」

教会を見上げたままの姿勢でシロウが感嘆の声を上げている。

高台のほとんども敷地にし、その奥に建てられている教会は、外観以上の荘厳さを感じさせる作りになっていた。深夜という時間も相まって威圧感すら感じる。

「衛宮くん、ここは初めて？」

「……ああ。来たことはない。孤児院を兼ねてるって話くらいは知ってるけどさ」

「そう。じゃあ少しかり肝を冷やすことになるかも」

「なんでさ？」

「さあ。どうしてかしらね」

不思議そうに首を傾げるシロウには答えず、凜は含むように笑ってから教会を目指して歩き出す。そうされるとシロウとしては立ち止まるか、凜に付いていくかの二択しかなくなってしまう。

結局、シロウは凜に付いていくことにしたようで、歩みを進め……やおら、私の方へと振り返ってきた。

「どうしたセイバー？ ほら、行くぞ」

「……そうですね。私は貴方の剣だ。傍にいて貴方の身を守る義務がある」

「大袈裟な奴だな。ちょっと話を聞いただけだったのに」

暢気という訳ではないのだろうが、落ち着いた口調で私を促すシ

ロウ。

以前私はシロウが話し終えるまで外で待機していたのだが、この教会の神父は気を許せる相手ではない。無事に出てくると“知って”はいるものの、待っていることなど出来なかった。

ギイと音を立てて重厚な扉が開かれる。そうすることで一気に視界が開けた。

中は一般的な礼拝堂と同じような作りになっているが、敷地はかなり広いほうだろう。しかし時間帯故か中に人の気配はない。

「遠坂、ここに居る人ってどんな感じの人なんだ？」

広い空間にシロウの声が反響している。

「どんな感じって、口で説明するのは難しいわね。十年來の知人だけど、私だって未だに性格は掴めてないもの」

「十年……か。そりやまた随分と年季が入った関係だな」

「一応わたしの後見人よ。ついでに言えば第二の師っていうところかしら」

「なんだって？」

大仰にシロウが驚いている。目を剥くという感じだ。

「なに驚いてるのよ、衛宮くん？」

「だって……普通驚くだろ。教会の人だろ？ そんな人が魔術とかって……ご法度じゃないのか？」

「だからエセなのよ。聖杯戦争の監督役として派遣されたヤツだもの。バリッバリの代行者よ。ま、もっとも、神のご加護があるかは大いに疑問だけど」

その時、かつん、という高い足音が礼拝堂に響いた。続けてアルトで響きの良い女性の声が耳に届く。

「失礼ね、凜。少しは師を敬ってくれても良いんではなくて？」

その人物は奥へと続く扉から現れ、ゆっくりとこちらに近づいてきた。

「な——っ!？」

思わず声が洩れる。

“彼女”は美麗な修道服を身に纏い、優雅な仕草で私達を観察している。

身長はシロウより少し高いかもしれない。綺麗な緑色の髪は肩で切り揃えてあり、ゆるやかなウェーブを描いている。スラリとした細身の美女。見た目から年齢は二十代の後半あたりだと判断できる。その“彼女”は大仰に掛けている眼鏡を押し上げ、靴音を鳴らしながら私達の前まで進んできた。

「まったく。呼び出しにも応じないかと思えば、こんな夜中に変わったお客を連れてくるなんて——相変わらずねえ」

「お久しぶり……かしら。レヴィア」

——レヴィア。凜がそう呼んだ人物を私は知らない。

私を知っているのは黒衣の男。ここに居るのは言峰綺礼という男のはずだ。なのに、どうしてこの場に知らない人物が現れるのか。

僅かに緊張感が増す。

勿論、まだ敵だと決まったわけではない。けれど私は、いつでも聖剣が抜けるように体勢だけは整えておいた。

「へえ。彼が“七人目”という訳ね」

レヴィアと呼ばれたシスターが、シロウをねめつけるように視線を這わせている。

「そうよ。一応魔術師なんだけど、中身はてんで素人だから見てられなくて」

「素人？」

レヴィアは右手を顎先に当てながら、ふむ、と頷くと、改めてシロウの目の前まで歩んできた。そして彼に向かって優雅に一礼を試みせる。

「私はこの教会を任されているシスターでレヴィア・エーデルフェルトと申します。七人目のマスター。貴方の名前を教えて貰えるかしら？」

やはり並んで見るとシロウよりも少し長身だった。

だからという訳ではないだろうが、彼女の迫力に押されたようにシロウが少し後ずさる。その際、彼女の顔や胸あたりを凝視していたような気も——シスターの微笑みには艶やかさがあり、女性である私でも見入ってしまうほど——したが、決して彼女の色香に押された訳ではないと強く思うことにした。

「……コホン」

軽く咳払いをしてみる。

それに触発されたのか、シロウも遅れて自己紹介を始めた。

「俺は……俺の名前は衛宮士郎。けど、まだマスターになるって決めた訳じゃない」

シロウの言葉を受けてシスターの目が驚きに開かれる。

「衛宮——？」

衛宮の名前を聞いて絶句するシスター。しかしそれも一瞬のことであり、彼女はすぐに柔和な表情に戻して、何事も無かったかのよう
に会話を続けた。

「そう。衛宮……士郎くんね。そして——」

眼鏡の奥の瞳が私に向けられた。その目がさつきとは別の意味で丸くなる。

「そちらがセイバー……かしら。でも、どうして雨合羽なんて着ているの？」

「……………」

「ふう。まあ、いいわ」

どうしてこれを着ているのか、その理由ならシロウに聞いて欲しい。けれど私の無言の答えを無視だと受け取ったのか、彼女は私から視線を外し、再びシロウの元に戻した。

その際に、胸元にある銀のクロスを軽く撫でるように指を這わせ、シロウに強調してみせたのを私は見逃さなかった。

「えっと、士郎くんって呼んでもいいかしら？ 貴方は先程マスターになるって決めた訳じゃないって言ったわね？ でも、それは大きな勘違いよ」

「……どうしてさ？」

「もう既にマスターになっっているからよ。なってしまった以上辞めることも他人に譲ることも出来ないの」

「そんなの、俺が聖杯戦争に関わらなければいいだけで、それで済む話なんじゃないのか？」

シロウの答えを受けて、シスターが落胆したように短く嘆息した。それから小さく肩をすくめて、凜に身体ごと向き直る。

「だから素人だって言ったじゃない。監督役としてしっかり説明してあげてね、レヴィア」

「……そうね。じゃあマスターとは何か、聖杯戦争とは何かから説明しましょうか」

七人のマスターと七人のサーヴァント。聖杯戦争という名の殺し合い。

求めるものはただ一つ。どのような願いでも叶えると云われる万能の器——聖杯。歴史に名を残す本物の聖杯なのかどうかはここでは関係ない。

現実に願いを叶える力があり、勝者に“それ”が与えられるということが重要なのだ。

「サーヴァンとの基本クラスは七つ。即ちセイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、バーサーカー、キャスター、アサシン。その枠に当て嵌めて英霊を召喚し、マスターに従わせる。最も、サーヴァントにも意思があるわけだから必ずしもマスターの意向に沿うとは限らない。故にマスターには命呪が与えられているのよ」

次々とシロウの知らない事柄が明らかにされていく。

シロウは時に質問し、凜に補足されたりしながら根気良く話を

聞いていた。彼なりに必死になって、自分が撒き込まれた聖杯戦争というものを理解しようとしている。

淡々と紡がれるシスターの言葉。レヴィアの説明を受ける中で、シロウは一つの決断を迫られていた。

——それはマスターとして戦うのか否か。

マスターを辞めることは出来ないと彼女は言ったが、その気になれば辞めることは出来る。故意に令呪を使い切ってサーヴァントとの契約を絶てばいいのだ。

私は彼が戦う道を選ぶことを知っている。

けれど、万一の確率で彼が私との契約をやめると、聖杯戦争に参加しないと云ったら？

そんなことはありえない。ありえないのに、一抹の不安が胸に去来し離れないのだ。

私はそつと彼の横顔を盗み見る。

真剣な表情。シロウからは突然の事態にも奥せず立ち向かう意思が感じられる。

「死傷者五百名、焼け落ちた建物は実に百三十四棟——」

その言葉を聞いた瞬間、シロウの表情が強張った。

息を呑むという言葉そのままに。もしかしたら、少し震えていたかもしれない。

「未だに原因不明とされるあの火災こそが、前回の聖杯戦争による爪跡よ」

「……………ッ！」

顔面蒼白になりながら、揺れる身体を必死に大地に繋ぎ止めるシ

ロウ。

この街で起きた火災の被害者であり、唯一の生き残り。彼にとっては辛い事実。シロウの苦悩が伝わってくると感じるのは自惚れだろうか。それでも彼は、辛い事実さえ乗り越える。

かの暗い地下の聖堂で、私に“間違った事実”を気付かせてくれたのは、彼の強い心の叫びだったのだ。

そこまで考え——思い出す。

そうだ。あの地下聖堂はこの地下にあるのだ。

黒衣の神父はいない。だが地下聖堂がないとは限らないのだ。果たしてあの場はどうなっているのだろうか。気にならないといえは嘘になる。しかしこの場を脱して調べに行く訳にもいかない。酷いようだが、今はそれよりも優先することがあるのだ。

「士郎くん。マスターとして選ばれるのは魔術師だけよ。その魔術師である貴方に覚悟はないのかしら。さあ、答えなさい衛宮士郎。この聖杯戦争を戦い抜くのか否かを」

決断が迫られる。けれど私が声を挟むことは出来ない。これは彼が決めなければいけないことだからだ。私に出来るのは、シロウを信じて待つことだけ。

一瞬の沈黙は葛藤の現れだろう。

その後、彼は意を決したとばかりにシスターを見上げて

「——戦う。俺はセイバーのマスターとしてこの聖杯戦争を戦う。あの火災が前回の爪跡なんだとしたら、あんな不幸な出来事を二度と起こさせる訳にはいかない」

はつきりと、そう宣言した。

「良い返事です。今回の聖杯戦争の監督役として正式に貴方をセイバーのマスターとして認めましょう。ようこそ、こちら側の世界へ――衛宮士郎」

シスターのアルトな声が礼拝堂に響き渡る。
こうして彼は、セイバーのマスターとして聖杯戦争に挑むことになった。

一段落ついたとばかりに、凜とシスターが会話を開始する。しかし既に私の意識は外へと向いていた。
妙な違和感が身体に纏わりつく。まるで誰かに見られているように。

――なんだこれは？

感じた違和感は敵意ではない。どちらかと言えば魔術や使い魔から受ける雑感に近い。

距離は判別できなかった。少なくともこちらから視認出来る距離にはいないだろう。ならば監視されているというより、様子を窺っているといった方が正確だろうか。

直接的な脅威ではないなら、今は詮索するべきではないのかもしれないが……。

「それじゃ、行きましょうか」

凜の声を受けて私の思索が打ち切られる。どうやらシスターとの会話も終わったようだ。

用件が済めば積もる話はないとばかりに、挨拶もそこに凜が

踵を返す。私とシロウもそれに合わせて、礼拝堂を後にしようとシスターに背中を向けた。

そのタイミングで、背後からシロウへ言葉が投げかけられる。

「そうだわ、士郎くん。最後に一つアドバイスをあげましょう」

人差し指を立てながら、つかつかとシロウに向けて歩み寄ってくるシスター。

ちよつと近寄りすぎだ。

「む……アドバイスってなんだよ」

「聖杯とは万能の器。どんな願いでも叶えることが可能なの。そう——どんな願いでもね」

こういうのを妖艶というのだろうか。シスターは艶のある微笑みを浮かべシロウを見つめている。

「求めなさい、衛宮士郎。そうすればきつとあなたの願いは叶う」

全て見透かしたような視線。眼鏡の奥にある緑色の瞳がシロウを一直線に貫いている。

——求めれば、叶う。

それは魔力の籠もった言葉のように、私にも、そしてきっとシロウにも染み渡っていった。だけど、どんな魅力があっても、私もシロウも聖杯を求めることはない。それはこの身をもって知っている事実。

それでもこの言葉は、小さな針のように心に突き刺さってくる。

「あんた……なにを……知ってる……？」

「私は監督役。この聖杯戦争を円滑に進めるのが役割なの。だからイレギュラーな事態が起これば対処する。けれど——この戦争の終結まで、あなたたちに会わないことを願っているわ」

シスターの綺麗な声を最後に、教会の扉は閉ざされた。

礼拝堂から外に出ると風が強く吹いていた。

冬の冷気が肌を刺すものの、空に雲はなく数多の星が煌くように瞬いている。ここは丘の上に当たる為か、地上よりもたくさんの星が見えるようだ。

故郷の星空を思わせる景色。それが私には少し嬉しかった。

そう感じたからだろう。私は知らず空を眺めていたようで、だから、シロウが私を見ていることに気付くのが少し遅れてしまった。

「シロウ、どうかしましたか？」

何かやりたいことがあるのに、決断がつかないとばかりに口を噤むシロウ。けれど、頭を振ってから意を決したのか

「いや、そのさ……頼りないマスターだけど、これからもよろしくな、セイバー」

そう言って、照れたように右手を差し出したのだ。

私はシロウの差し出された右手を呆然と眺めているだけで、芳しい反応が返せない。

それを不審に思ったのか、彼の表情が少し翳る。

「あれ？　もしかして握手は駄目なのか？」

「い、いえ。突然だったので、少し、驚いただけです」

互いの右手を重ねる。

それだけでシロウの温もりが伝わってきた。風は冷たいけれど、この温もりさえあれば寒くなどない。

そう思えるほどに。

「今一度ここで誓いましょう。私は何があっても貴方の剣であり続けます。そう、何があっても——」

「……ああ」

手を握り合って微笑み合う。なのにどちらもぎこちない笑みしか浮かべてられない。

それが何だか私とシロウらしい。そう思った。

「——ふうん。その分じゃ放っておいてもよさそうね」

「と、遠坂っ!？」

「凜っ!？」

慌てて手を離す。

別に見られて困る訳ではないのだけれど、柄にもなく照れてしまったのだ……。

「仲良くなったなら、ちょうどいいわ。貴方達がそうだった以上私達も容赦しないから」

私達——そう言った凜の後ろに、いつの間にかアーチャーが控えていた。

弓の英霊であるアーチャー。

結局、以前の召喚の際に彼の真名を知ることにはなかった。彼はバーサーカーから私達……いいえ。きっと凜を逃がす為に犠牲になった。しかし、果たして今回はどうなるのだろうか。

以前と違って彼は負傷していない。凜が協力体制を築かないのなら、いずれ戦うこともあるのだろうか。

けれどシロウは凜とは争わないだろう。私も出来れば彼女と事を構えることはしたくない。

「容赦しないって、どういう意味さ？」

「衛宮くん？ 私達つてもう敵同士だつて理解してる？」

「む？ なんてさ。俺、遠坂と争うつもりなんかないぞ」

私にとっては予想通り言葉だったけれど、彼女にとっては予想外だったのか。凜は、ハア……と盛大に溜息を吐いた。

シロウは良く言えば実直。悪く言えば朴念仁。なので凜の気持ちも少しは理解できる。私も“何度”そういう気持ちを味わったことでしょう。

しかるに、彼は人の話を聞いていないと思える節がある。それは彼の大きな欠点の一だと思う。

その凜がキツと視線をきつくして、シロウを睨み据えた。

「あのね、勘違いしているようだから言っておくけど、ここまで連れてきてあげたのは貴方がまだ“敵”にもなっていないからよ。けれどセイバーと契約して衛宮くんも正式なマスターの一人になった。この意味分かるわよね？」

「それは——分かってる。でも、やっぱり遠坂とは戦えない。それは俺の目指す戦いじゃない」

「衛宮くん……あのね……」

「凜、このままでは埒があくまい。相手の覚悟など確かめずとも、倒し易い敵がいるのなら遠慮なく叩くべきだ」

凜の声を遮るようにしてアーチャーが意見を挟み込む。

「アーチャー？」

「それとも何か？ 君は“また”その男に情けをかけるのか」

その言葉をは逆鱗だったのか。はっきりと分かるくらい凜の表情が変わった。

殺気を纏ったような厳しい表情に。

「……アーチャー。そのことは言わないはずよ。それともなに？ 令呪で縛って欲しいの？」

「いや、これは失言だったか。マスターの意向には添うように努力しているのだがね、この男に関してのみどうも抑制が効かない」

場の雰囲気が少し危ういものに変わっていく。

アーチャーははっきりとシロウを敵視しているように見える。微々たるものだけれど殺気すら感じた。

前回は感じることもなかった気配。それは私の勘違いだったのだろうか。

そう思った時、何の前触れもなく軽やかな少女の声が響いた。

アーチャーの微かな殺気など吹き飛ばすような、明確な殺意を持つて。

「——ねえ、お話は終わり？」

綺麗な声音。まるで銀細工が奏でるような澄んだ音。

歌うような軽やかな少女の声は、教会へ続く坂道の下方から聞こ

えてきていた。

「こんばんわ、お兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

シロウを見上げながら無邪気に笑っているのは、冬の娘。そして、その少女の隣に聳えるようにして黒い巨人が立っていた。

「あれって……バーサーカー……？」

凜の声が震えている。

正規のマスターである凜には、あの敵の恐ろしさが正確に伝わってくるのだろう。

「なんだ……アレ……」

シロウなど完全に凍りついている。

無理もない。アレは生きるものの全ての本能に訴えかけるものがある。

即ち——逃げなければ死ぬと。触れれば壊されると。

絶対的な死の象徴。同じサーヴァントを以ってしても太刀打ちさえ出来ない難敵。

「本当、反則モノだわ……。あれってセイバー以上じゃない……」

震えながらも、それに負けまいと凜がバーサーカーを睨みつけている。

——気丈だな。

凜に感心しながらも、私は静かに聖剣を出現させた。

最早、戦いは避けられない。

「シロウ、決して前には出ないでください」

「え、セイバー？」

「何があっても——例えば、私が倒されそうになっても、自信の安全を最優先させてください」

シロウの前に出て、彼を守るように聖剣を握り込む。

——バーサーカー。その正体はギリシャ神話最大の英雄ヘラクレスだ。

彼に生半可な攻撃など一切通じない。英霊であるサーヴァントの力を以ってしても、傷一つ付けることすら困難なのだ。

故にあの敵を打倒するには“奇跡”が必要になってくる。

以前戦った時は、押し込まれ、打ち倒され、傷ついて倒れた。だけれど今の私はあの時とは違う。あの時以上に守りたいと、失いたくないと思っている。

——敵が何者であれ、私はこの手にある剣で斬り払うのみ。

道が開けないのであれば私が開く。

決意を込めて構えを取った時、背後から僅かな身じろぎの気配を感じた。

「凜。アレは生半可な相手ではない。ここは三人で当たった方が得策だと思うが」

アーチャーは冷静に状況を分析しているようだ。

そう、以前と違い今は弓の英霊も健在なのだ。

——勝算はある。

「——そうね。逃げるって訳にもいかないし。セイバーはそれでいい？」

「はい。前衛は私が勤めます。凜とアーチャーは後方からの援護を」
勝手に話を進められた。そう思ったのか、シロウが声を荒げた。

「ちょっと待ってくれ。俺は数に入っていないのか？」

「戦うのは自由よ、衛宮くん。でも出来るなら逃げなさい。貴方もマスターなら、あの敵が如何に化物なのか分かるでしょう？」

アーチャーと凜も構えを取る。

それを待っていたかのように、冬の娘から明るい声が届いた。

「相談は済んだ？　なら、始めちゃっていい？」

かの娘は心底今の状況を楽しんでいるようだ。

「はじめまして、リン。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォ
ン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン……！？」

彼女の名前が凜に動揺が走らせる。

それを確認してから、イリヤスフィールが愉快的調子で殺戮開始の合図を下した。

「——じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

坂道を飛ぶように駆け下りた。

その下方、闇の中を黒い巨人が疾走する。

坂を駆け上がってくる巨大な体躯。それは全てを破壊する重戦車を思わせる突進だった。

そんなバーサーカーに向かって、闇の中を閃光が走る。

それはアーチャーが放つ光の矢。光矢は幾条もの軌跡を夜の闇に穿ちながら、バーサーカーに向かって突き進む。

「！」

放たれた矢の合計は六。その一つ一つが砲撃もかくやという威力を持っている。

それがすべてが直撃だった。それでもバーサーカーには怯む気配すら生まれない。

「うそ、効いていない——!?」

驚愕の声は遠坂凜。

光矢を退けた巨人は速度を緩めず駆け上がり――瞬間、激しい衝撃がこの身を震わせた。

「——ちい！」

バーサーカーの斧剣と私の聖剣が空中でぶつかり合い、そこを中に発生した衝撃波で視界がぶれる。

そこから続けざまに振るわれる巨人の一撃。威力も速度も尋常ではない。だが、撃ち負ける訳にはいかない。

「はあああ——ッ！！！」

剣に魔力を込めて、唸りを上げて迫る一撃を打ち払う。
その都度衝撃波が発生し、砂塵が撒き上げられた。私の聖剣とバ
ーサーカーの剣斧。ぶつかり合い奏でられる剣戟の音は、どこまで
も激しくなっていく。

——踏み込めッ！

直撃を受ければ、如何に神秘に編まれた鎧に守られていようと致命傷は避けられない。それでも敵の間合いの中に身を晒し、一撃を
撃ち込む。

何故なら私はセイバーだ。
剣を扱って負ける訳にはいかない。

「…………ッ！ アーチャー！ 援護ッ！！」

凜の声に応じて今度は八矢、アーチャーの矢が放たれた。
それは眉間であり、鳩尾であり、心臓、喉元と人体にあるあらゆる
急所に向かって飛んでゆく。
それでも——

「■■■■■■■■■■！！」

七発までがバーサーカーによって払われてしまった。唯一こめか
みに直撃した矢もダメージを与えてはいないようだ。
しかし、僅かに隙が出来た。

この好機を逃さず、全力で聖剣を撃ち込み——

「——なっ！！」

それすらもバーサーカーは払い退けた。

更に一撃を振り払った刃が嘘のように振り戻り、私を襲う。

「
...
く
—
ツ
ツ
！」

幸い聖剣で受け止めたものの、私の身体は木の葉のように軽く十メートルは吹き飛ばされてしまった。

追撃してくるバーサーカー。

それを阻止しようと、アーチャーの矢と凜の魔術が炸裂するが……。

「.....！」

咆哮を上げながら巨人が疾走する。

かの敵は十メートルなど一瞬で渡りきり、下段から掬い上げるよ
うな一撃を私に向かって撃ち放つ。

「——ッ！？」

更に吹き飛ぶ小さな体躯。

衝撃で視界がブレるが、それでも視線を巨人から逸らさずまっすぐに見据え……

「馬鹿なっ！？」

驚愕を通り越し、思考が止まる。

死の気配を持ったまま迫りくるバーサーカー。その向こう側に、視界の隅に、こちらに向かって駆け出そうとしているシロウの姿が目に入ったのだ。

彼は焦燥したような表情で何事かを叫び上げている。

——どうして？ 来ないでと言ったのに。

ぎりつと臍を噛む。

このままでは“あの時”と同様にシロウがバーサーカーの前に飛び出してくるかもしれない。

以前、一度、彼は私の身代わりとなってバーサーカーの凶刃に倒れたのだ。

自身の安全よりもサーヴァントの身を優先させるなど、マスターが取るべき行動ではない。考えられる限り最悪の行動であり、愚かなマスターだと言える。

それでも、そんな彼だからこそ私は誰よりも愛しく想っている。あの時は鞘の加護で助かった。けれど今度も同じ目に遭って助かる保証はない。

ならば、私の取るべき道は一つだけ。

一瞬だけ視線を逸らし“場”を確認した。

あの場所ならば、こちらの力を活かし巨人の力を減じることが出来る。

刹那、迫るバーサーカーの一撃。

全てを砕くような津波のような一撃だった。私はそれを受け、力に乗るようにして――

「セイバアツ——ッッ！！」

シロウの絶叫が響く中、私は空中高く飛ばされていた。

「あつはつは。そのままやっちゃえ、バーサーカー。どうせアーチャーとリンじゃアナタの宝具は越えられない。先にセイバーを殺しなさい」

イリヤスフィールの声を受けて巨人が疾走する。それを視界の隅に捉えてから私は受身の体勢を取った。

そうだ、追って来いバーサーカー。

私を追ってここまで——自分の死地まで来いっ！

聖剣を握る手に思いと魔力を込めて。私は心の中で叫んだ。

「セイバアア——ツツ——！」

既にアーチャーと遠坂は、セイバーとバーサーカーの後を追って駆けている。

セイバーは空中高く吹き飛ばされて、近くにある荒地——教会墓地までその身体を運ばれていた。

「……これが、聖杯戦争。サーヴァント同士の戦い……」

身体が震えて、震えて、両手で肩を抱いても止まらない。

怖くないはずがない。バーサーカー、アレは桁違いだ。衛宮の庭で見たランサーも強かったが、そもそも存在が違う。追えば殺される。そんなこと、言われなくてもハッキリと判ってしまうくらいに。

それでも、それでも！ あの少女を失うことの方がもっと怖かった。

ついさっき、手を重ねて一緒に戦うと誓ったばかりなのだ。

青い月の光で満ちた土蔵での邂逅。あの幻想にも似た世界が胸の中に去来する。

金砂のような滑らかな髪。吸い込まれそうなほど深い碧の瞳。その綺麗な姿に見惚れた。本当に華奢で小さな少女なんだ。そんな彼

女がああバーサーカーと戦ってるんだ。

「くそッ！ 答えなんて、とうに出てるじゃないか」

全力で駆け出した。

俺に何が出来る訳でもない。遠坂の言うように逃げるのが一番なのかもしれない。それでも俺には、彼女を、セイバーを見捨てることなんて出来なかった。

会ってから数時間しか経っていないのに、彼女は俺の為に戦ってる。俺に何が出来なくても、彼女のマスターならばせめて近くに。

息が切れるのも構わず駆け続けて墓地に到達した。

そこで俺は――神話の再現を見ることになる。

結論から言えばセイバーは健在だった。

墓石が乱立する中を縦横無尽に駆け抜け、彼女はバーサーカー相手に一歩も引いていない。

対するバーサーカーは神話に登場する怪物そのものだ。巨人は一振りで墓石を薙ぎ払い、セイバーの激烈な剣戟を受けても怯む様子すら見せない。

墓石は石の塊だ。その重さは相当なものだろう。それが木の葉を散らすように吹き飛んでいるのだ。

――なんて、化物。

そんな言葉が脳裏に浮かんだ。

そつだ。これは怪物に挑む勇者の物語。
儚い少女が巨人に挑む、神の物語。

激しい閃光が走る。あれは、剣戟による魔力のぶつかり合いか――
―？

「ちょっと、衛宮くん、なんでいるのっ!？」

セイバーとバーサーカーの剣舞に夢中になっていたら、何処にいたのか、気づいたら遠坂が隣にいた。

「なんだ、遠坂か」

「遠坂か、じゃないでしょっ!　とにかくそこは危ないから下がちなさい!！」

引きずられるようにして、遠坂に物陰に連れこまれる。

「逃げなさいって言ったの、聞こえてなかったっ!？」

激昂する声。

何故だか遠坂はかなり本気で怒っているようだった。

「……馬鹿言っな。俺だけ逃げられる訳ないだろ」

「それは一人前になって口に出来る台詞よっ。いいから今からでも逃げなさい」

「半人前なのは否定出来ない。けど……それでも俺はセイバーのマスターなんだ。彼女が戦っていて俺だけ逃げるなんて出来ない」

遠坂は啞然として、惚けたように俺を見ている。

けどそれも一瞬のことで、表情を一変させると地団駄を踏むように足と手を振り上げて――結局、すつと下ろした。

湧き上がった怒りを精神の力で押し殺したんだろう。

けど、一度は沈静化したはずの怒りは結局殺しきれずに爆発する。

「……馬鹿あつ！ 士郎っ！ あのバケモノ見て死ぬって思わないの！？ アンタに死なれたら、折角助けて教会まで連れてきてあげたのが無駄になるでしょっ！」

そんな罵りを聞いても、俺には怒りより嬉しさが込み上げてきた。ああ、やっぱりなとも思う。

義務感とかじゃなくて、遠坂はコイツなりに無知な俺を助けてくれたんだ。そんな事をして自分にとって何の得にもならないのに、ずっと見ていた優等生な遠坂とは違ったけど、それでも思ってた通りのやさしい娘だったんだ。

それが素直に嬉しかった。

「そっか、やっぱりな。遠坂って良い奴だったんだな」

「なあ——っつ！」

遠坂の顔が赤くなっていく。

俺は思ったことを口にしたけなんだが、遠坂にとっては予想外だったみたいだ。何か言葉にしようとして、止めたり、やっぱり口を開こうとして、また止めたり、ちょっと見ていて可愛い。

とうとう最後には、拗ねたようにそっぽを向いて口を尖らせていた。

「……………ふんっ。衛宮くんがそうしたいなら、そうすればいいわ。もう、知らないんだからっ」

そこへ信じられないような爆音が響いた。

慌てて視線を移してみれば、バーサーカーの一撃が大きく地面を叩き砕いている。セイバーはと視線を転じてみれば、巨人を廻り込むようにして斬撃を加えていた。

ここにきて、セイバーはあのバーサーカー相手に互角の剣舞を演じていたのだ。

「……すごいわね、セイバー。この分だとこのまま押しきれるかも……」

遠坂の言う通り確かにセイバーは凄い。あのバーサーカー相手に互角の接近戦を繰り広げている。

触れるだけで墓石を砕き、吹き飛ばすような一撃が乱舞する中を少女の身で戦っているのだ。

それでも——互角。

俺には遠坂ほど樂觀はできない。

その時だった。ふとした違和感が俺の脳裏に襲いかかる。

あれ？ おかしい。何か決定的に足りない気がする。

神技のようなセイバーの剣。嘘のようなバーサーカーの破壊力。

この場に足りないものは——

「……………そうだっ！」

「ど、どうしたの衛宮くん。突然怒鳴ったりして？」

「そうだよ、アーチャーだ。遠坂、アーチャーの奴はどこ行ったんだ？」

さっきから死闘を演じているのはバーサーカーとセイバーの二人だけ。アーチャーの姿はおろか矢の一矢さえ飛んできてはいない。

「え？ そうね……。一体何処に——」

そこまで口にしてから、はっと遠坂の動きが止まる。

「……え、アーチャー？ 離れろって……どういうことよ!？」

遠坂がキョロキョロと辺りを見回している。

何故それが見えたのか、俺には判らない。それでもはつきりと見えた。

ここより小高い丘の上。その頂上で弓を番える奴の姿が。

「……あいつ!」

奴はアーチャーだ。弓を使っているのは不思議でも何でもない。

それでも全身に言い知れぬ悪寒が走りぬける。

とても悪い予感がするんだ。

奴が狙いをつけているのはバーサーカー。

そして、その場所にはもう一人、銀の甲冑に身を包んだ少女が――

「セイバアアア――ツツ!!」

身体が勝手に動いていた。

遠坂が後ろで何か叫んでいるがそんなものは聞こえない。今は全力で駆ける。あの少女だけを目指して。

渾身の一撃が炸裂する。今の一撃は効いているはずだ。例えばバーサーカーといえど不死身ではあり得ない。

衝撃を受け、黒い巨人が僅かに後退する。私は巨人に向かって疾走しようとして――そこで信じられないものを見た。

追撃しようとする私に向かって、マスターが、シロウが突っ込んで来ているのだ!

「……なっ!？」

シロウに下敷きにされながら、それを見た。

大きく揺れる炎が墓地を火の海に変えている。凄まじい破壊の余波は未だ各所でくすぶり、バーサーカーの全身を焼いていた。

先程まで私がいた場所が大きく抉れている。

それは爆心地という言葉がそのまま当てはまるかのような光景。

シロウが来てくれなければ私も炎に焼かれていた。

それでも、そんな炎の中に在っても尚バーサーカーは健在だった。

「よ…かった。セイバー、無事……」

「シ、シロウっ!」

彼の背中に廻した手が濡れた感触を感じ取る。

人の温もりを持ったソレは……。

「血……? そ、そんなっ。シロウ! シロウ! どうして……」

「セイ……バーが無事なら、良…かった。俺な…ら、大丈夫…夫だから……」

「喋らないでっ、マスターっ!」

彼を抱えて走る。今は一刻も早く彼を安全な場所まで届けないといけない。

両腕を廻して強く抱く。こうすれば“鞘”の加護が彼を守ってくれるはずだ。

大地を蹴る足に力を籠め、私は闇の中を疾走する。今はただ一刻も早くこの場を離れる為に駆けるのみだ。

「……へえ、見直したわりん。やるじゃないアナタのアーチャー。」

いいわ。戻りなさいヘラクレス」

ずっと戦況を見つめていたイリヤが、静かな声でバーサーカーを呼び戻す。

それまで暴風のように暴れ廻っていた黒い巨人は、素直に少女の声に従って後退した。

「——なによ、ここまでやつといて逃げる気？」

「逃げるんじゃないわ。見逃してあげるのよ、リン。このまま潰してしまつたら面白くないでしょう？ だからもう少しだけ生かしておいてあげることにしたの」

「余裕のつもり？ きつと後悔することになるわよ」

「フフフ。遠吠えにならないように楽しみにしているわ。また会いましょう」

歌うような声と共に、少女は巨人と一緒に闇の中へと消えていった。

セイバーとバーサーカーの死闘。その光景を遠く離れた場所から覗き見ている人物がいた。

そこは落ちた霊脈であり、幾重にも結界が張り巡らされた魔術師の陣地。

——柳洞寺。

その霊地の最奥に、柳洞寺に住む人でさえ近づかない禁忌の場所がある。

暗く、狭い小さな部屋だ。光源は壁に設えられた幾つかの蠟燭の

み。

その部屋の中央で、輝く水晶球を見つめる二人の人物がいた。

一人は深い紫色のローブを纏った妙齡の女。

彼女は口元に微笑を浮かべながら水晶球を巧みに操っている。水晶の表面は一種のモニターとなっていて、先程までのバーサーカーとセイバー、そしてアーチャーの激闘が写されていた。

「成程。バーサーカー……これは厄介な存在ね」

艶やかで、妖艶な美声。

「だけど流石はセイバーと言ったところかしら。あんなマスターに使役されるのは可哀想。正直、勿体ないわ」

ひらりと手を翳すと、水晶球にアーチャーと凜の姿が映った。

「アーチャーの宝具の威力——興味深いわね。こちらにも思ったより使えそう。どちらもアナタより余程有能そうだわ」

紫色のローブの女が、侮蔑の意味を込めた視線を第二の人物に向けてる。

そこに居たのは華奢な少女だった。

体格的にはセイバーと然程変わらないだろう。華奢な身体に鎧を纏っているのも同じ。その手に剣は握られていないが、視線には切れるような鋭い覇気を宿していた。

しかし、一番注目を引くのは彼女の見事なまでの赤髪だろう。

後頭部で結わえてなお腰まで届くほどの長い髪。それは蝋燭の炎を受けて燃えるように輝いていた。

瞳の色は漆黒。その瞳がまっすぐ水晶球を見据えている。

「せいぜい頑張りなさい“アサシン”。セイバーを手に入れた後で、お払い箱にならないようにね」

操っていた水晶球を消して、ローブの女がその部屋を後にする。

一人だけ部屋に残された少女。

アサシンと呼ばれた赤髪の少女は、じっと一点だけを、水晶球が在った場所だけを見つめていた。

第四話

淡い色の風景が陽炎のように、浮かんでは消え、また浮かんでは消えていく。

そんな儚い光景を眺めながら、これは“夢”なんだと気付いていた。

だからだろうか。見たことのない景色の中に俺自身がいても、これは夢の中だからなと変に納得してしまう。

——しかし、ここは何処なんだ？

吹きつける風が強い。

周りに普通あるはずの景色は遥か眼下にあつて、夜のライトアップが目眩しい。

そうだ、ここはビルの屋上。幾つも連なるビル群の中でも一際高く、広い屋上を持っている高層ビルだ。

そして視界の中には、黄金に輝く剣を構える一人の少女の姿があった。

彼女が手にしている剣こそ、伝説に謳われる聖剣。

月明かりを受け輝く刀身には一点の曇りすらなく、敵を切り裂く武器でありながら、見る者を魅了する美しい造形。星の光を集めて作られたという最強の——

彼女がその剣を振り上げ“真名”を叫ぶ。

剣から放たれた黄金の閃光は、まるで夜空を断ち斬るようにして、どこまでも、どこまでも伸びていった。

深い深い森の中で、俺が懸命に叫んでいる。

喉が裂けてもいいとばかりの大声で——使うなって、あいつに叫んでいた。

朝靄が立ち込める森の奥深く、激闘の果て既に彼女は瀕死だった。全身は鮮血で赤く染まり、それでも俺の為に宝具を使おうとした。使えば——自分自身が消滅すると知っていたのに。

だから叫んだ。お前が消えるなんて認められない。令呪を使っても止めたんだ。

——お前が使える剣なら俺が用意する。

敵は黒き巨人。不滅の英雄だ。それでも、奴を倒さないと生き残れないのなら奴を超える剣を作り出す。

そう、それが俺の役目だ。剣製こそ俺が出来るたった一つの術。

災厄とはあの男のことだったんだろう。

黄金に輝くサーヴァント。

心を通わせたと思ったのも束の間、災厄によって彼女は鎧を碎かれ、半ば意識を失った状態で血の海に沈んでいた。俺も生きているのが不思議なほどの重傷を負っている。

だけど、それがどうしたと、敵に向かった。

だって、俺がああ敵を倒さないと彼女がいなくなってしまう。それなら、こんな痛みなんてどうってことはない。

一歩進むだけで全身から力が抜ける。それでも背中に彼女がいる限り俺が倒れることはない。

だが、無慈悲にも振り上げられる敵の魔剣。

太陽を思わせる閃光に成す術もなく消えるはずの俺を、一つの奇跡が救ってくれた。

その後、俺は彼女のやわらかな腕に包まれて——意識を失う直前に、この立場が逆だったらしいのなんて考えたっけ。

彼女を庇ってバーサーカーの凶刃に倒れた。

柳洞寺へと続く石段で意識を失った彼女。その後彼女を背負い、

二時間かけ家まで連れて帰った。

友人の手で学園が地獄になった。衛宮の家を異形の使い魔が襲ってきた。全部、いつも彼女と一緒にだった。

俺の作ったご飯を美味しそうに食べてくれた。稽古は容赦がなかったな。からかったら本気で怒ったり。

もちろん喧嘩だつてした。

彼女はブリテンの赤き竜——伝説の中にあるアーサー王その人だ。

国を守る為、そこで暮らすみんなの笑顔の為にと、苦しく惨めな最後が待っている“分かって”いても剣を取り続けた。

一人の少女が背負うにはあまりにも険しい道。

けれど挫けず、負けず、ひたすらに剣を取りつづけ——勝ち続けた。

結果、いつしか王は人の心がわからないと蔑まれるようになる。

周りの誰からも理解されず、部下に裏切られてさえも、それでも皆の笑顔の為に彼女は歩み続けた。死の直前に至ってさえ国を想い、救うべき道を模索して聖杯を求めた少女。

傷つき、傷つき、傷ついて、終わってみれば、自身の幸せなど一切省みずただ国の為に。

それが俺にはどうしても許せなかった。頑張った奴は幸せにならないと嘘だ。

もう彼女は十分過ぎるほど役目を果たしたんだ。なのにアイツは“聖杯を得ても”自分の為には使わないなんて言う。俺にはそれが我慢できない。

だから、ぶつかった。

腕の中に抱いた彼女。王でもなく、騎士でもなく、一人の少女として抱いた。

本当はもっと一緒にいたかった。何度だって抱き締めたかった。

失いたくなんてなかった。

——彼女こそが俺の全てだった。

それがたった二週間の出来事。彼女と過ごした日々だった。

だけとおかしい。だって今見てる光景を俺は知らない。なに一つとして体験していないんだ。

知らない人物。知らない場所。知らない記憶。“彼女”とは昨日出会ったばかりだ。まだ満足に話もしていない。

なのに何で——何でこんなにも鮮明で色のある光景なんだろう。これは夢だ。夢の中の出来事。

だけど夢なら、もう少しだけ彼女が笑ってくれたらいいのになんて、そんなことを思ってしまった。

「……………ん」

だんだんと明るさが増して、視界に光が戻ってくるのを感じる。

「あ……………れ？　もう、朝か……………」

だけど随分と光を強く感じる。受ける陽射しの感じから早朝という訳ではなさそうだ。

俺はなるべく早起きを心がけているし、目覚ましをかけなくても朝の六時前後には目が覚める。けど今日は身体が疲れていたのか寝過ごしてしまったらしい。

仕方ないなあっと布団を跳ね退けててから一気に半身を起こす。

——そこでヘンなモノを見た。

視界に入ったその光景を理解するまで、十数秒の時間を要する。

「セ——セイバーっ!？」

なんと、枕元でセイバーが正座しながら俺を見つめていたのだ。

「起きたのですね、シロウ」

「な、なな、なんでセイバーが俺の部屋にいるんだっ？」

慌てて佇まいを直し、思わず俺もセイバーの前で正座してしまう。

「シロウは、昨夜のことを覚えていませんか？」

「え？ 昨夜のこと……？」

思考を巡らせる。記憶を探るようにして昨夜のことを思い出してみよう。

それはフラッシュバックのように突然現れた。

——黒き巨人。その隣にいた銀髪の少女。迫り来る歪な一矢。そして炎上する教会墓地。

俺は彼女をその災厄から救うべく飛び出して……。

次第に記憶が鮮明に、クリアになっていく。

「そ、そうだ！ セイバーは大丈夫なのかっ!？」

「私よりも貴方の方が心配です。シロウは私を庇ったおかげで背中に大怪我を負ったのですよ？」

「……大怪我だった？」

確認の為に背中に手を廻してみる。だけど怪我らしきものもなけ

れば痛みもない。

念のため服を脱いで調べてみたものの、やっぱり怪我の痕跡すらなかった。

「あ……れ？ なんともないぞ、俺」

「どうやら完治したようです。しかし貴方も無茶をする。バーサーカーがいるところまで飛び込んでくるなんて、一歩間違えば大変なことになっていました」

「う……。でもさ、セイバーが危ないって思ったんだ。だから……」

「ええ。確かにシロウのおかげで私は助かりました。アーチャーの宝具はかなりの威力でしたから、あの場にいたら私とて無事ではいられなかったでしょう」

そうだ！ アイツ、アーチャーッ！

あの場にセイバーがいるのを知っていて攻撃したんだ。撃てば巻き込むのを承知で……いや、敢えてセイバーとバーサーカーが範囲に入る時を狙ったんだ。

直接見た訳じゃないけど、アイツが笑いながら弓を射る光景が脳裏に浮かぶ。

「くそっ！ アーチャーの奴。セイバーまで巻き込もうとしやがつて……！」

どうにも相性が良くない奴だと思っていたけど、今はつきりした。俺はアイツがキライだ。

だけどセイバーは、小さく首を振って俺の言葉を否定する。

「それは違います、シロウ。彼とは別に協力関係にあった訳ではありません。アーチャーが私とバーサーカーを狙ったのは、サーヴァントの行動としてなんら不自然ではないと思います。既に聖杯戦争

は始まっていたのですから」

む……この気持ちはなんだろう。何だかセイバーがアイツを肯定するのは面白くない。

思わず言葉に棘も出てしまう。

「それでも俺はアイツは嫌いだ。こればかりは相性の問題だから、セイバーに何と言われても意見を曲げないぞ」

そんな俺の言葉を聞いて、セイバーがクスクスと小さく笑う。

「アーチャーも貴方のことを嫌っているようですね。これはやはり似た者同士ということでしょうか」

「——は？ やめてくれセイバー。俺とあんなヤツを一緒にしないでくれ」

「そうでしょうか。案外、シロウは将来アーチャーのようになるのかもしれないよ？ 年齢的にまだ成長する余地はあります」

「なんだよセイバー。それは俺がチビだって言いたいのか？」

「い、いえ。決してそういう訳では……」

セイバーが慌てて首を振っている。

確かにまだ成長する余地はあるだろうけど、アーチャーと同じくらいの身長になるなら20cmは伸びないといけないんだ。それは幾らなんでもあり得ないだろう。

「ま、俺とアイツは根本から違うんだろうよ。だからセイバーもアイツに似てるなんて言わないでくれ」

いいえ、私はとても似ていると思います。とセイバーが穏やかな表情で俺を見つめている。

それはとても眩しくて、俺がずっと望んでいたセイバーの笑顔で………って、ん、ちょっと待て。

俺、今なにを思った？

そういえば、今朝はセイバーの夢を見たような気がする。内容なんてほとんど覚えていないけど、確かに彼女の夢を見た。それが影響してるのか、昨日までとは明らかに違う心境になっている気がする。

欲しかった物をやっと手に入れたような………違うな。大切なものが戻って来たような。それはマスターとして戦うことに目的を見出したからだろうか。

それに、その、今はセイバーが服を着替えていて、見ていると少し照れる。

白色のブラウスに紺色のスカートという組み合わせが、清楚な雰囲気 of 彼女の彼女にとっても似合っているのだ。

その姿を見ているだけで、涙が出そうなくらい懐かしいものを感じるが……いや、きっと気のせいだろう。だって彼女とは昨日会ったばかりなんだし。

それにしてもこの服はどうしたんだ？ 俺の家に女物の服は置いてない。

「ところでセイバー。その服どうしたんだ？」

「これですか？ これは凜から頂いた物です」

「遠坂から？ アイツ、ここに来てたのか」

「先程まで居たのですが、やることもあるので戻ってしまいました。——— そうだ、シロウに凜から一つ伝言がありました」

「伝言だった？」

はい、と頷いてから、セイバーがすうと息を吸い込む。

それから遠坂みたいな表情を作り出して俺をキッと睨んだ。

「いい、衛宮くん。アナタもマスターになったんだから、くれぐれも用心しなさいよ。それでなくても危なっかしいんだから。それと分からない事柄はセイバーにキツチリ確認しておくこと。一人で出歩くなんてもつてのほかよ。分かった？ 分かったら返事っ！ ……だそうです」

……セイバーの奴、いつの間にそんなに遠坂のことを知ったのか。今の声音はとっても良く似ていた。おかげで遠坂に目の前で怒鳴られてたような気分になる。

遠坂とも昨日知り合ったようなもんだけど、何となくアイツの性格とかは掴めてしまった。

学園では猫かぶってやがったなアイツ……。

「私も凜に念を押されましたから。余程シロウのことが心配だったのでしょう」

「心配……してるのかなあ。俺には単なる腹いせに思えるんだが……」

「いいえ、凜は本当にシロウのことを心配していました。私には分かりません」

セイバーは遠坂のことをとても信頼しているようだ。

短い邂逅だったけれど、女同士何か感じ入るものがあつたのかもしれない。それに遠坂の言うことももっともだ。なんせ昨日だけで三回は死にそうな目に遭っている。これは尋常な回数じゃない。

知識で危険を防げるかは分からないが、知らないよりは知っている方がいいに決まってる。

「じゃあ遠坂のありがたい忠告に従って、セイバー先生に色々教えて貰いますか」

「了解しました、マスター。何でも訊いてください」

えっへんと胸を反らせるセイバー先生。
その胸元に視線が自然と吸い寄せられて——と、いかん、いかん。
俺は慌てて視線を逸らせて、誤魔化すように時計で時刻を確認した。

時間は11時を少し過ぎた辺りで、もはや朝というより昼に近い。そう思ったら途端に空腹感を意識してしまった。一度意識したら何か腹に入れないと気が済まなくなってくる。

「……もう、昼だな。話しは昼飯を食べながらしよう。セイバーも食うだろ？」

パチパチと目を瞬かせるセイバー。
あれは何かを期待している目だ。

「用意して貰えるのでしたら是非。ちょうど私も空腹を感じていたところでした」

「よし、じゃあ気合入れて作るか。セイバーは居間で待って……って、場所分かるか？」

「問題ありません。昨夜のうちに屋敷の構造は把握しておきました」

「そっか。じゃあ期待して待っていてくれ」

「はい。“期待”して待っています」

セイバーはコクコクと頷きながら、俺の作った昼食を美味しそうに食べてくれた。

作る側から言わせてもらえれば、こんなに嬉しいことはない。心配した箸の使い方も上手いものだったし、行儀も非常によろしく、結局食べている間はあまり会話することができなかった。

んで、食後にお茶を入れてそこから改めてセイバーと話しを始める。

サーヴァントとは？ 宝具とは？ 聖杯戦争とは？ そして七つのクラスの特徴など。知っている事柄は深く、知らない事柄は要点を逃さないようにしながら、お互いの思いや考えを披露しながら進めていった。

でも、こうして話しているだけなのに、時折セイバーの声に聞き惚れてしまいそうになる。

本当に綺麗な声だ。燐として淀みがなく、澄んだ小川のような透明感がある。雑踏の中でも彼女の声は聞き逃さない自信があった。

それに、今更だけど彼女はとても美人だ。平静を装っていても内心はかなりドキドキしている。

そんな折り、頭を突き合わせるような格好で会話していたからか、俺の額に彼女の前髪がそつと触れた。金砂を思わせるきめ細かい髪。撫でるととても柔らかそうで、心地良いだろうなあと夢想してしまう。

「シロウ？ 聞いていますか？」

いけない、思わず見惚れていたようだ。

「あ……ああ。ごめん。ちょっと考え事をしてた」

「はあ。もう一度言いますからよく聞いていてください。既に聖杯戦争は開始されています。シロウはマスターなので、油断などせず、常に辺りに気を配っててください。外出する時などは私が同行しますから決して一人で出歩いたりしないように」

「学校とか、あるぞ？」

「休んでいただくのが一番ですが、どうしても登校する時は私に一声をかけてください」

んー、セイバーを連れて登校か。

それはそれで大騒ぎになること間違いなしだ。衛宮が金髪美女を連れて来たと冷やかされる光景が目に見えかぶ。

いかに………大問題だな。

まあ、学校に関しては明日考えるとして、後は概ねセイバーの言うことは正しい。もう一度バーサーカーやランサーと出会ったら、間違いなく俺は殺されてしまうだろう。

「ああ、分かった。なるべく一人では動かない」

「なるべくではありません。絶対に一人で出歩かないように。それだけでなく貴方には放浪癖が………」

はつきりと喋るセイバーにしては珍しく、言葉尻を濁し何やら呟いている。

「ん？俺がどうしたって？」

「い、いえ。こちらのことです。とにかくシロウには戦う術がないのですから、そこをよつつく肝に銘じて行動するように。」

「——いいですね？」

ずいっと顔を寄せてくるセイバー。よっぽど信用がないんだな、俺。

「了解した。セイバーを不安にさせる行動は慎む。それでいいだろう？」

「一抹の不安は残りますが……シロウがそう言うのなら、これ以上の追求は詮なきことでしょう」

それから二人で色々話をした。

ほとんど聖杯戦争に関する事だったが、少しだけ好きな食べ物とか、好きな物の話しなんかを織り交ぜてみた。怒られるかなと

思いもしたが、予想に反してセイバーは朗らかに答えてくれる。
こうして好きな物について語ったりするところを見ると、年
相応の普通の女の子と同じなんだなと感じる。

そんな一面が見れたことがとても嬉しかった。

それこそ楽しい時間はあっという間に過ぎる。気が付いたら時刻
は夕方に射しかかろうとしてた。

「シロウ、少し失礼します」

セイバーが席を立つ。きっとトイレだろう。

じゃあ俺は彼女が戻ってくるまでに新しいお茶でも入れてくるか。
そう思って席を立ち、居間の隣にある台所へとむかった。

「あれ、牛乳切れてるな……」

お茶を入れようと台所に来たついでに冷蔵庫を開けてみる。中を
覗いて見れば、牛乳他、幾つかの食材が切れていた。

昼食で結構材料も消費したし、牛乳を買うついでに商店街で食材
を補給してくる方がいいかもしれない。お茶請けも必要だろうし。
明日には虎も来る。買って置いて損はないだろう。

セイバーには……まあ、すぐ戻ってくるし連絡しなくてもいいか。
そう思っ、て、急ぎ財布を取ってから深山の商店街を目指して家を
出た。

「ありがとございましたー」

とりあえずコンビニで牛乳を購入し、次の店を目指す。

商店街には行きつけの店も多く、買い物する順番とか決まってるもんだ。この後は八百屋に寄って、肉屋にも寄って、最後に甘いものでも買って帰ろう。

そう思った時、妙な違和感を感じ、自然と足が止まった。

——なんだ？　もしかして見られてるのか？

針で刺されているような鋭い感覚。

その圧力は俺の前方。真正面から注がれていた。

そこに居たのは同年代の一人の少女。

少女は歩くこともなく、その場に立ち止まってじっと俺のことを見つめている。

彼女はラフな格好の上に赤いダッフルコートを羽織っていて、遠目にもよく目立っていた。しかし一番目を引いたのは腰まで届こうという真っ赤な髪の毛。ポニーテールに結わえてあって、燃えるように鮮やかな真紅の色合いがとても夕日に映えていた。

件の少女がゆっくりと俺に近づいて来る。

只知道り合いじゃない。あんなに目立つ少女なら一度会ったら忘れるはずがない。

その少女は、俺の一メートル手前くらいで止まって

「一人で出歩くななんて、馬鹿なマスターね」

「え……？」

それをかわせたのは偶然だった。

少女が何かを振るった瞬間、手に持っていたビニール袋が綺麗に切れて牛乳が地面にぶちまけられた。

地面に染み入る白い液体を見て心臓が凍りつく。

——マスターと少女は言った。ということは、少なくとも聖杯戦争の関係者なのは間違いない。

思わず足が一步、後ろに下がった。紅の少女は、まるで物を見るような冷たい瞳で俺を見据えている。

けど外見に騙されちゃ駄目だ。

少女は確かな殺気を身に纏っている。俺だって魔術師の端くれだ。それが本物の殺気かどうかくらいの区別はつく。

ならば、目の前の少女は——敵っ!?

嘘だろ？ 夕方とはいえ、こんな商店街のど真ん中でっ！

「くそっ！」

悪態を吐きながらも、少女に背を向けて全力で駆け出した。

俺は何処かで甘く見ていた。戦うのは夜だけで人目のある場所では襲われないと。——聖杯戦争。マスターとして戦うということを頭で理解している“つもり”になっていただけだった。

背後を振り返る余裕はない。

俺は何も考えずに走り続けた。

次々に過ぎ行く景色。行き交う人々。そんなものに気を配る余裕なんてまったくない。時々人にぶつかりながらも、ただただ全力で駆け抜けた。

「はあっ、はあっ、はあっ……………俺、馬鹿か…………」

気が付いたら近くにある公園まで来ていた。だけど、逃げるならもつと人目のあるところじゃないと意味がない。

いや、無関係な他人を巻き込むなんて出来ないから、ここに来たのは正解じゃないけど間違ってもないはずだ。衛宮の家に向かうのが良かったんだろうけど、無我夢中でそこまで考える余裕が無かつ

た。

呼吸を整えながら辺りを伺う。

公園の入り口。ジャングルジムにブランコ。物陰は特によく見ただけど何処にも少女の姿はない。もしかしたらうまく逃げ延びたのかもしれない。

注意深く、もう一度だけ辺りを伺う。

——やはり、誰の気配も感じない。

ふう、と安堵の溜息を吐いた時、件の少女の声が真後ろから響いた。

「もう、逃げないの？」

心臓が止まるかと思った。

俺は慌てて跳び退いて、少女と距離を取る。

「あなたマスターでしょう？　なら、殺される覚悟も出来ているはずよね」

少女の手には剣が握られていた。

小柄な少女には不釣り合いな長剣。形や幅は西洋剣のそれだが長さだけが異様に長い。少女の身長を優に越えて二メートル程はある。それを少女は当たり前のように構えていた。

「なん——で？」

「何で？　変なことを訊くのね」

刹那、少女が踏み込んできた。それを脳が確認した瞬間に俺は地面を這うようにして逃げた。

剣線なんて見えないし、どうしようもない。ただその場から逃げただけだ。

少女の一撃は俺の背後にあったジャングルジムの、まるで飴細工を切るみたいに容易く両断している。

「……嘘だろ」

ジャングルジムって鉄で出来てるんだぞつ。こんなことが普通の人間に出来るはずがない。

出来るとしたら、それは……。

「——おまえ、サーヴァントか？」

足元に飛んできたジャングルジムの破片を拾いながら立ち上がる。こんな物でもないよりマシだ。

「——^{トレース}同調、^{オン}開始”……”」

鉄の棒みたいなそれに強化の魔術を施す。

抵抗するには武器がいる。必死だった。

そのおかげか運良く魔術は成功し、鉄棒の強度が数倍に強化された。

「強化？　けれど、そんなことしても無駄よ。どうせ——あなたはここで死んでしまうのだから」

少女が動くと同時に俺は鉄棒を眼前に突き出す。続けて腕に伝わってくる衝撃。

強化を施し強固になっていた鉄棒だが、少女の剣を一撃受けただけで大きく曲がってしまう。それでも後退しながら振るい続けた。

型なんてないデタラメな振り回し。当然そんな攻撃が相手に当たるはずもなく、少女の剣をもう一度受けただけで俺は大きく体勢を崩された。

「ぐあ——っ！」

少女はその気になれば俺なんかすぐに殺せるだろうに、この剣術ごっこに付き合っている節がある。単にあきれているだけかもしれない。そう思ったものの、俺に対抗できる術があるわけではない。そして幾度目かの斬撃。それを受けて俺は盛大に尻餅をついてしまった。

「ぐっ……」

地面は砂地だったけれど衝撃で息が詰まる。それでも何とか呼吸を整えて、眼前の少女を見上げた。

少女は剣を下げたまま、さっきまでと変わらない冷たい視線を向けてくるだけ。夕日はもう地平に落ちていて、空に上った月の光が少女の凛々しい面を照らしている。

場に訪れる一瞬の静寂。

公園に幾つもある街灯がチカチカと明滅し、一斉に光が点った。その光を受けて、少女の赤い髪が夜の公園にあって炎のような存在感を現す。夜風を受けて靡く様は宛ら炎が具現したようで——

「セイバーのマスター。あなたの聖杯戦争はここで幕引き。求めた聖杯を得られず死ぬなんて——残念ね」

少女がゆっくりと剣を引き、それから俺の心臓に向かって突き出した。

「――俺は聖杯なんて、求めてないっ！」

地面を転がって何とかその一撃を避ける。続けて肩に激痛が走った。剣の一撃が俺の肩を掠めていたのだ。

激しい痛みで顔が歪む。けれど本来なら串刺しだ。かわせる速度じゃなかったのに、一瞬、少女の剣速が鈍ったのだ。おかげで肩を切られただけでまだ命が繋がっている。

「セイバーのマスター。あなたは今、何と言った？」

「……なに？」

傷口を抑えながら少女を見つめる。

少女は立ち止まったまま、俺を見据え僅かに苛立っていた。正直、彼女の意図が分からない。

「聖杯戦争に参加する者は例外なく聖杯を求める。なのにあなたはマスターでありながら報酬である聖杯を求めていないの？ それはどうして？」

「……聖杯なんていらない。俺が戦うのは悲劇を繰り返させないため、聖杯とかマスターとか、そんなもののためじゃない」

少女の黒色の瞳が揺れている。

彼女は何かを考えるように視線を這わせて――改めて剣を構えた。

「……不可解ね、あなた。けれど、ここで死ぬ事実是不変。残念だけどそれが聖杯戦争なのよ」

少女が剣を下げたまま殺気を叩き付けてきた。ただそれだけだというのに、身体が震え、満足に動くことが出来なくなる。

——脳裏に浮かぶ明確な死の予感。

俺の視線が少女の持っている長剣に釘付けになる。あれを振るわれれば終わりだ。それだけで俺は死ぬ。

けど、このまま殺されるとか冗談じゃない！

まだ俺は何も成し切らないし、それにここで死んだらセイバーを裏切ることになる。そんなのは俺には認められない。

だから足掻く。何か手段はないか、生き残る術はないか。

何か……何かないのかッ！？

「さようなら」

思考が纏まる前に少女が剣を引いた。

「くそお——っ!!」

駄目もとで強化した鉄棒を頭上に構える。

せめて一撃でも防げればと目を閉じた瞬間、耳元で鋭い剣戟の音が響いた。

「……………なっ？」

強化鉄棒を持った腕には何の衝撃も伝わってきてない。かといって切られた箇所もなかった。

不思議に思っただけ目を開いてみれば、目の前に赤い大きな背中が。

「おま…え…？」

少女の一撃は、俺の眼前で黒と白の双剣によって受け止められていたのだ。

「馬鹿が、何をしているっ！」

赤い男——アーチャーが振り向きざまに俺を蹴り払う。

「ぐわあっ！」

その蹴りだけで、俺は軽く五メートルは吹き飛ばされ地面に無様な格好で転がった。

口の中に、砂の味と血の味が広がる。

ぐ……ア、アイツ……何で……。

大きく咳き込みながら腹を押さえる。幾ら助ける為だってあの馬鹿は加減つてもものを知らないのか……！

「凜、そのマヌケを頼む」

アーチャーの声を受けて、一人の少女が俺を守るような位置に立つ。

「と、遠坂……？」

「アンタねえ、何やってるのよっ！ 一人で出歩くななんて……セイバーから私の伝言受け取らなかったのっ……！」

そこにいたのはコートを羽織った遠坂凜の姿。

「マスター、馬鹿の相手は後にしておけ」

そう言いながらも油断無く少女を見据えているアーチャー。

赤髪の少女は、俺と対峙した時には見せなかった苦い表情をしていた。

「貴様——アーチャーか！」

「おや、お互い初見だったと思ったのだが、何故私がアーチャーだと判ったのだ？」

「——ちっ！」

舌打ちをしながらも、少女が真紅の鎧を身に纏う。それはセイバーのような西洋風の甲冑だった。

けど重装というよりは軽装に近い。防御力よりも動き易さを優先させてるのだろう。月光を受けて紅炎の鎧が輝いていた。

少女は改めてアーチャーを睨み付け——自身よりも長い剣を振り上げる。

こうして、夜の公園で両者の戦いが始まった。

二人のサーヴァントが同時に大地を蹴る。瞬間、辺りに響く剣戟の音。闇夜を幾つもの閃光が走っていた。

少女は長剣を手足のように自在に操り、アーチャーは双剣を的確に操っていく。正確に見えている訳じゃない。なんとなく、そう感じただけだ。

どうやら俺は“剣”というものに人並み以上に関心があるらしい。剣と剣がぶつかりあう激しい音、光が軌跡を描く剣線。そんな二人の剣舞を見惚れるように見つめながら、俺は両者の武器にも注視していた。

片や見るものを畏怖させるような長剣。

長さは二メートルに達し、その間合いは槍のそれに迫る。秘められた魔力は未熟な俺でもわかる程に潤沢だ。

片や一対で作られた双剣。

無骨で豪奢さもなく、ただ敵を切る為だけに在るような剣。そこに籠められた思いは戦意。ただそれだけだ。それでも俺は、その双剣を美しいと思っていた。

黒と白、陰と陽。二本で一つ。あれは夫婦剣なんだろう。

アーチャーが素早く踏み込み、少女目掛けて双剣を左右に払った。その一撃に対し、少女は真っ向から双剣を打ち払い、勢いそのままに突撃する。

二メートルの長剣がアーチャーの首元へ。アーチャーの体勢は崩れていてその一撃をかわせない。そう思った。だがアーチャーは事前に感じていたように双剣で少女の剣を受け止めていた。

それでもなお少女は止まらない。流れるような動作でアーチャーの足元を払う。

アーチャーはその一撃を、後方に飛び退くことで凌いでいた。

月下の公園で行われる二人サーヴァントの戦いは、まるで舞うような攻防だった。

少女の剣技は鋭く流麗で、アーチャーの剣技は卓越していて技巧いずれも一歩もひかず、公園の中央で激しく入れ代わり交差しながら剣を交えている。

こうして眺めていると分かる。少女の戦闘スタイルはセイバーによく似ていた。

小柄な身体ながらアーチャーに打ち負けることはなく、時に押し返し、双剣を避け、その一撃の威力は迸る魔力の猛りを体現するかのような強力で。

対するアーチャーは、無理に自身の間合いに入ろうとはせず、迎撃を主としながら相手を見極めている。そうした上で鋭い連撃を繰り出し相手を迎え撃っていた。

「——グウッ!!」

「——ちいっ!!」

一際大きな剣戟の音。それに続いて二人のサーヴァントの呻き声が耳に届いた。

今の攻防を経て、両者が間合いを開いた状態で対峙する。その距離は約二十メートル。

隣にいる遠坂も魔術を放つタイミングを計ってはいたようだが、両者の攻防が早すぎてそれを掴みかねているようだ。下手に放てばアーチャーをも巻き込んでしまうから。

当のアーチャーは、双剣を下段に構えたまま、何やら納得したように頷いている。

「ふむ。剣を使っではいるがセイバーは既に現界している。ならば私が知らないサーヴァント、ライダー、アサシン、キャスターの内で該当しそうなのは——アサシンといったところか」

アーチャーの推測を受けても、少女は肯定も否定もしなかった。しかし、その表情がアーチャーの言葉が正しいであろうことを物語っている。

「どうだ、引く気があるのなら見逃すが？」

「見逃す？　ここで死ぬ貴方が言っべき言葉ではないわ」

少女が上段に剣を構えた。

「……やれやれ。こんな男の為に魔力の無駄遣いはしたくなかったのだが——これもマスターの意向だね。悪く思わないでくれ」

言葉と共にアーチャーが双剣の存在を手の中から打ち消す。

「なにしてんだ、アイツっ！」

その行為に思わず声が出た。

如何にアーチャーといえど、武器なしで少女の剣を防ぐ術はないはずだ。訝しく思ったのは少女も同じなのだろう。警戒しながらアーチャーの様子を伺っている。

そのアーチャーの口元が小さく動いた。

「I am the bone of my sword」

距離的にここまで届かないはずの声。だけど俺にははっきりと聞こえた。

アーチャーは左手に漆黒の弓を生み出し、続けて右手に歪に擦れた剣を出現させる。

そう、あれは剣だ。矢じゃない。

それなのに、アーチャーはその剣を番え、狙いをアサシンに絞り

「――宝具!？」

叫び声を上げて、少女が剣に魔力を込め始めた。

瞬間、少女を中心にして凄まじいまでの魔力の乱舞が起こる。それは風を伴って俺達のところまで届いていた。まるで嵐だ。

アーチャーは間近で少女の魔力を受けつつも、動じることなく弓を限界まで絞り、更に魔力を充填させた上で

「ガルド・ボルグ 偽・螺旋剣」——！！」

真名と共にアーチャーの矢が放たれる。

それは轟音と閃光を纏い、空間を捻じ切ったかのような圧倒的な破壊力を持って少女に迫っていった。対する少女は魔力を溜め込んだ剣を構えたままそれを迎え撃つ。

「はあああああああ——つつ！！」

少女の長剣がアーチャーの“矢”を捉える。神速の矢を魔力に彩られた剣が迎え撃った。

刹那、辺りは昼間のような閃光に包まれ、爆音と同時に大量の砂塵が巻き上げられる。

——視界が、遮られた。

「ぐ——くう……！」

「な……なによ、これ……何も見えないじゃない……」

俺も遠坂も目を開けていられない。

砂埃は数十秒も舞いつづけ、その間は両手で瞼を覆い、目に砂が進入するのを防ぐので精一杯だった。口の中なんて砂利の味しかない。唾と一緒に吐いても吐いても進入してくるんだから意味がない。

それでも、いつしか砂塵は収まりを見せて視界もゆっくり回復してきた。涙に濡れた目を力いっぱい見開き、状況の確認に勤める。

果たしてそこには、街灯に彩られるようにして立つアーチャーの

姿しかなかった。辺りに真紅の少女の姿は何処にもない。
それを確認した遠坂が、ゆっくりとアーチャーの元まで近づいていく。

「……………ぺっぺ。んもう、砂まみれじゃない。それで、やつつけたの、アーチャー？」

「いや、恐らくは逃げたな。まったく、とんだ魔力の無駄遣いをしたものだ」

やれやれ、と肩を竦めてからアーチャーが嫌みな視線を隠そうともせず俺を見た。

「む……………俺が悪いつて言うのか？」

「当たり前でしょ、衛宮くん。自分が如何に無知で馬鹿で愚かなことをしたか、判つてて言ってるのかしら？」

遠坂が微笑んでいる。そう、微笑みながらすごく怒っていた。

「……………いや、少しは、悪かったかなって、思ってる……………」

「す・こ・し？」

「その……………海よりも深く反省してます」

「ふんっ。当然よ！」

俺の答えに満足したのか、遠坂が背中を向けて歩き出した。

「ん？ 何処行くんだ遠坂。帰るのか？」

俺の言葉を聞いて、遠坂がピタッと立ち止まった。
そしてゆっくりとこちらに向き直る。

「帰る？ 衛宮くんの家に行くのに決まってるでしょう？ 護衛も必要だろうし、何よりきっちりはつきりきちんと言い聞かせてあげないと、死ぬまで理解しなさそうだから」

遠坂さんはとっても笑顔でした。

「……ふう。凜、忠告として言わせてもらえれば、それはとても無駄なことをしようとしているぞ？」

「私だって、こんなの心の贅肉だって理解してるわよ。でも、いいのっ！」

スタスタと再び歩きだす遠坂凜。そして大袈裟に肩を竦めていたアーチャーも姿を消していく。もう付き合ってられん、という感じだ。

それからしばらく俺は夜の公園の中でぼつんと佇んでいた。

「シロウウウツツ——！！！」

セイバーの絶叫が居間に響き渡る。

「あ、あな、貴方は、何故こうも人の言うことを聞かないのですかっ！ 一人で出歩くなと、あれほど言ったではないですかっ！」

「があー！ と凄い剣幕で吼えるセイバー。その、ライオンみたいな迫力がある。」

「シロウ、そこに正座してください。今宵は貴方にきっちりと言い含めなければ気がすみません」

もう、正座してます、セイバーさん……。

遠坂はというと、セイバーの隣で据えた目で俺を見ている。口を挟まないのはいいたいことがないのではなく、既に吐き出した後だからだ。

公園からの帰り道、もう耳にタコが出来るほど延々言われ続けた。しかし非は俺にある上に助けてもらった身の上では反論も出来ない。大魔神とかした遠坂の小言をじっと耐え忍んで、そして家に帰ってきたら……これだよ。

「聞いていますかつ！ シロウ——ッ——！」

「き、聞いている。だから、もう少し声を落として、な、セイバー」

セイバーによる第二の叱責が待っていたのだ。

はつきり言って彼女はものすごく怒っている。烈火の如く、溢れる溶岩を塞ぎ止めようともしない怒れる活火山のように。

「一体誰の所為で声を荒げていると思っているのですっ？ いいですかシロウ。貴方はだいたい——」

くどくどくどくど。

セイバーによるお説教は続いていく。

う……うう。今は黙って耐え忍ぶべし……。

俺には、ただ頭を垂れたまま、嵐が過ぎ去るのをじっと待つしか道が残されていなかった。

第五話

「うわあ——っ！」

僅か一撃。

セイバーの放った竹刀を肩に受けて、俺は無様に道場に転がった。

「やっぱり……セイバー……強いな……」

昨夜のセイバー台風が過ぎ去った後、俺は機嫌を戻したセイバーに道場での稽古を願い出た。

あの赤毛の少女、アーチャーが言うにはアサシンだったか。俺はあの少女相手に何も出来ず、アーチャーが現れなければ確実に殺されていただろう。

少しは抵抗らしい抵抗も示したかったし、男の意地もある。付け焼刃で何が変わる訳じゃないけど、色々考えるよりこうして身体を動かしている方が気分的には楽だ。

それに、セイバーとの稽古もまんざら無駄でもない。

対抗なんて出来ないし、こちらは一太刀すらも浴びせられない。

それでも、セイバーに打ち倒される度に戦う気構えみたいなものが出来てくる。

気構え、心構え一つで実戦では随分違うだろう。

「シロウ。貴方は攻撃よりもまず防御を優先するべきです。不意の事態でも多少なりとも相手の攻撃を凌ぐことが出来れば、その間に私が駆けつけるなり、何なりと方法があります。しかし、一撃で殺られてしまっってはどんな手段を用いることも出来ない」

転がった俺を見下ろしながら、セイバーが苦言を呈してくる。
俺は痛む肩をさすりながら、口を尖らせて跳ね起きた。

「そうは言ってもな……。セイバー手加減してないだろ？ 剣筋なんて見えないぞ」

「十分に力は抑えています。それはシロウが見ようとしなから、見えないのです」

むう。セイバーが力を抑えているのは分かってる。でも容赦なく打ち込んでくるから手加減されてる気がしない。もっとも、こういう実践に近い稽古の方が、短い時間でも得るものがあるのだろう。

二人で道場の真ん中に戻り、改めて竹刀を構える。

そこで……

「そうだ、シロウ。先程、一つだけ伝え忘れていた事がありました」
突然思い出した、という感じでセイバーが竹刀を下げた。

「む——なにさ？ お説教ならもう沢山だぞ」

「説教などと……。あれはシロウが——いえ、今伝えたいのはその手にある令呪についてです」

「令呪？」

左手の甲を見してみる。

そこにあるのは、痣のように浮かび上がった三つの聖痕。

「そう、令呪です。例えば今日のように私と離れている時に敵に襲われた場合、その手にある令呪を使用することで瞬時に私を呼び出すことが可能なのです」

「そんな事が出来るのか？」

「はい。どれほど距離が離れていても令呪を使えば可能です」

改めて令呪を見る。

サーヴァントを律する三つの命令権。それが本当ならほとんど魔法の域だ。サーヴァントは破格の存在とはいえ使い魔だ。マスターに令呪を介して命じられれば、例えばそれが“どんな命令”であろうと従わなくてはならない……らしい。

「でも、俺、使い方知らないぞ？」

「強く念じるだけで良いのです。それだけで私と繋がる事が出来ます」

「そっか。じゃあ——学校に登校も出来るな」

一瞬にして道場内の時間が停止した。

「……………は？」

俺の発した言葉の意味が分らないと、セイバーが目を丸くしている。

「だってさ、セイバーを一瞬で呼べるなら別に護衛してもらわなくってもいいじゃないか。危険な時は令呪を使えばいいんだから」

「……………その、シロウ。先程までの私や凜の話を“真剣”に聞いていましたか？」

「聞いてたさ。第一、学校にセイバー連れて行けないだろ？ 学校に行くのは夕方までだし生徒も大勢いる。先生だっているんだ。こんなに安全な場所はそうないぜ？」

何というかセイバーが変な顔をしていた。いや、あれは絶句しているのか。言いたいことがあるのだが、言葉がみつからないという

感じた。

俺、そんなに変なこと言ったかな？

「あ……………い、いえ。シロウの言いたいことは分かります。ですが、今は非常時です。学校くらいは行かなくても良いのではありませんか？」

「大丈夫だって、セイバー。バイトも行かないし終わったらすぐに帰ってくる。本当、心配ないって」

俺の言葉に耳を傾けつつ、彼女から見つめられる。どうやら逡巡しているようだ。

眉根はきゅつと寄せられて、碧の瞳は絶対に俺から視線を逸らさない。その思索は実に十分以上に渡って繰り広げられた。

それでも最後には、彼女は大きな溜息と共に俺の我侭を認めてくれたのである。

「はあ……………貴方が頑固なのは分かっていましたが……………。本当、一度言い出したら聞きませんね。無理に反対したところで、どうせ無駄でしょうし、了解しましたマスター。但し、絶対に無理はしないこと。危険が迫った時は令呪を使うこと。いいですね？」

逡巡しながら出したセイバーの答え。

それでも嬉しかった。なんだかんだ言いながらセイバーは俺を信頼してくれている。

「ありがとう、セイバー。うん。無茶はしないさ」

その信頼に応えようと言葉に力を込めてみた。だけどセイバーは“その言葉は今朝も聞いた気がしますね”と嘆息するのだった。

改めて一息吐いて、セイバーが竹刀を構え直す。

「シロウ、まだ時間があります。稽古を続けましょう。……久しぶりの稽古なので、少し楽しくなってきました」

「それはいいけど、久しぶりって、セイバーはよく稽古とかしたのか？」

驚いたようにセイバーが目パチパチさせている。それを誤魔化すように小さく咳払いしたセイバーは、慌てて竹刀を下げた。

「そ、そうですね。私は騎士でしたので、け、稽古はよくしたものです」

うーむ。

何となくセイバーの仕草が怪しいんだが……まあ、無理に詮索するほどのことじゃないか。セイバーの言う通り、俺もこの稽古が楽しくなってきたところではある。態々水を注すこともないさ。

そして今セイバーは竹刀を下けている。

これぞ千載一遇のチャンス！！ 説教の恨みを晴らすべし！

「——スキありだっ！ セイバー！ 貰ったあああっ！」

卑怯とでも何とでも言っただけ。どうしてもセイバーから一本取りたかったのだ。

だが……。

「甘いっ！ 甘いですよシロウ！ 先程頂いた白玉あんみつチョコ饅頭並に甘いですっ！」

渾身の一撃すら難なくあしらったセイバーの竹刀が、俺の背中をビシッと打ち据えたのだった。

翌朝、いつもの通り桜と藤ねえが朝ごはんを食べにきた。……が、同席を渋ったセイバーの願いで紹介するには至らなかった。

まったく律儀というか頑固というか。変にセイバーは石頭なところがある。遠慮することなんてないのに。

今日の夕食時には、セイバーが嫌がっても力ずくで食卓に連れて行くでしょう。大勢いる家の中で、一人だけで食事をさせるなんて俺には我慢できない。

だけど、それは今日の夜の話だ。今のセイバーは衛宮の家で留守番中のはずである。

ということで、今日は学校へ行こうと思っていた。

学生達には評判のよろしくない坂道を駆け上げれば、俺が通う穂群原学園に到着する。

——時刻は8時過ぎ。

まだ十分に間に合う時間だ。

多くの学生が校門を目指し歩く中に混じって、坂道を上り続ける。まるで昨日までのことが嘘のような、聖杯戦争なんて関係ない日常の風景。こんな普通の光景が懐かしいと感じる日が来るなんて、思いもしなかった。

だからこそ、この日常の風景を侵食し、壊そうって奴がいるなら俺が止めてみせる。それが“衛宮士郎”としての生き方だからだ。

親父から受け継いだ——俺の理想だから。

その為にはもっと強くならないとな。帰ったらもう一度セイバーに稽古してもらって、鍛えてもらわないと。

そんな事を考え、心の中で一人決意を新たにしている間に学園に到着したようだ。

だが、門を潜り抜けた瞬間——正確に言えば、学園の敷地に一步

足を踏み入れた瞬間に、全身を奇妙な違和感が走り抜けた。
ドクンと心臓が脈打つ。

なんだ……これ？

急に水の中に飛び込んだような感触。

言い様のない圧迫感。だけど、それは一瞬のことで、感じた違和感
は急速に収まってしまう。

「気のせい……か？」

周りを見回しても俺みたいな違和感を感じた風な学生は皆無だ。
辺りの風景にも特に変わった印象はない。

昨日から色々あったから、単に疲れてるだけかもしれない。そう
思っ、俺はそのことはとりあえず置いておいて、教室に向かうこ
とにした。

校舎に入って近くの階段を駆け上がり、自分のクラスがある階ま
で到達する。

そこで制服姿の遠坂と鉢合わせした。

「よう、遠坂。結構早いんだな」

手を上げて挨拶したのに、なぜか遠坂からの返事がない。ないど
ころか、遠坂はぼかんと口を開け、啞然とした表情で俺を見ている。
む……どうしたんだろう。

低血圧でまだ眠いのか？　しかし意識はハッキリしているように
見える。

朝食に苦手な食べ物でもでたのか？

「どうした遠坂？　何か悪い物でも食ったか？」

「ア……アンタ………何で？」

声が僅かに震えていた。

「ん？ 言いたいことがあるならハッキリと言ってくれ。いまいち聞こえずらい」

どうも俺の声も素通りしたようだ。遠坂は心ここに在らずと放心している。だけど、突然強い意思の力を瞳に宿したかと思ったら、俺の首根っこをむんずと掴んだ。

「な——っ！？ いきなり何すんだ遠坂っっ！ そこ持たれたら歩けないだろっ！」

俺の抗議もなんのその。

遠坂は俺を引きずるようにして、校舎の屋上まで連行して行くのであった。

「馬鹿あああ——っっ！！」

屋上に着いての開口一番。遠坂の怒鳴り声が俺を襲った。耳がキーンとする。

「な、なんだよ、いきなり。ビックリするじゃないか」

「ビックリしたのはこっちの方よ！ アンタを見た時は我が目を疑ったわっ！！」

何が原因なのか。遠坂嬢はかなりご立腹のようだ。

「……言ってる意味が解らない。もつとよく解るように説明してくれ」

この俺の言葉が遠坂の導火線に火を点けたようだ。遠坂の顔はみるみる間に真っ赤になっていく。

歯をぎゅっと食い縛り、必死に怒りを堪えている遠坂凜。だが、もうすぐにでも怒りのボルテージはMAXになって器から溢れてしまいそうに見える。

拳を強く握って震えている遠坂。

うゝむ。屋上だけあって風が強いけど……別に寒くて震えてるって訳じゃないよな。

「……あつつんつつたツツ……!!」

怒鳴ろうとしたのか、盛大に口を開きかけたものの、それを意思の力で無理やり閉じ込めた。どうやら遠坂さん、中々の精神力をお持ちのようだ。

代わりに思い切り溜息を吐いて、遠坂が改めて俺に視線を向ける。

「……士郎。昨日あれだけの目に遭って、更にあれだけ説教されて、それでもまだ理解できていないよね」

「だから、どういうことなんだ遠坂？ おまえなんで怒ってたんだ？」

今度は我慢出来なかったようで、遠坂はキツときつい視線を向けるや、拳が入るくらいの大口を開いて

「何でッ！ アンタはッ！ サーヴァントを連れずにッ！ 学校にッ！ 来てんのよッ！！ 命が惜しくないのっ!？」

「ぐっ——わ!!」

凄まじいまでの声量、大声だった。耳を指で塞いでも貫通して脳まで届いている。

「が……学校内は安全だろ？ 人も大勢いるし、いざとなったら令呪でセイバーを呼べばいい」

「まだそんなこと言ってるのっ！ アンアには学習能力がないワケ？ 昨日死にかけたばかりでしょうがっ！！」

「ああー！ と遠坂が吠える。

「そ、そんなに大声出すなって。俺だって用心くらいしてるさ」

用心してるという俺の言葉に対し、遠坂から、はあ…と盛大な溜息がこぼれた。

「あのね、士郎。気付いてないようだから教えてあげるけど、私たちの他にもこの学校にマスターがいるわ」
「な——ッ!?」

聞き違いでなければ、遠坂はこの学校にマスターがいると言った。

マスターと言えばあのマスターしかいない。即ち聖杯戦争に参加している七人の魔術師の内の一。そのマスターが居るのなら、当然サーヴァントもいるはずだ。

——サーヴァント。

あの圧倒的なバーサーカーや、赤い髪をした少女。そして俺を殺したランサー。誰一人取っても英雄の名に恥じない存在だ。

今までは偶々うまく切り抜けて来られたが、そうそうサーヴァントと遭遇して生き残れるはずもない。偶然は何度も続かないから偶然なのだ。

そのサーヴァントが……この学校にもいる？

「と、遠坂！ この学校にマスターがいるのかっ！？」

「ええ、そうよ！ ここに結界が張ってあるの気づかなかった？」

結界って——もしかして校門を潜った時に感じた違和感は……。

あれが魔術の類に関する違和感なのだとしたら、かなり広範囲に渡る結界じゃないのか？ そんなものをおいそれと張ることが出来る魔術師っていったら、大の付く魔術師になる。

「学校を覆うように結界が張ってある。魔法並に高度なヤツよ。発動したら学校が地獄に変わるでしょうね」

「地獄になって……大変じゃないかっ。何をのんびりしてるんだ、遠坂っ！」

すぐにでも何とかしないと。

そう思って駆け出した俺の腕を、他ならぬ遠坂が掴み止めた。

「慌てないで。高度な分だけ完成するまでに時間がかかるわ。私も呪刻を壊して回ってるし、発生するまであと八日ほどかかるんじゃないかしら」

「呪刻……？ 八日………？」

「こんなの張れる奴なんて限られるから、たぶんキヤスターが、魔術に精通してるサーヴァントじゃないかと思うのよ。コレ、かなり危険な結界ばいから、仕掛けた奴はかなり危ないやつね」

「……………」

「呪刻は——言ってみれば結界の基点ね。学校全土を覆うようなヤツだもの。呪刻だけで相当な数がある。まあ、イタチごっこだけど壊せば少しは嫌がらせにはなるかな」

何が学校は安全だ。

そんなことを言っただけで安穩としてたら、遠坂が怒るのも当然だった。

「士郎、散々言ってきたけど、もう普通の常識とは切り離して考えなさい。私たちはマスターで、殺し、殺される側の人間なのよ」

理解していた。死にそうな目に遭って理解したつもりだった。それでもまだまだ甘かった。

犠牲を出してからじゃ遅い。けれど“まだ”間に合った。

「分かった、遠坂。俺、明日から学校に来ないよ。来る用事があるときはセイバーも連れてくる」

「ふんっ。やっと理解できたようね。遅すぎるくらいだけど……まあいいわ。私も士郎もまだ生きているしね」

生きている。

それこそが聖杯戦争において一番重要な要素なのだろう。生きてさえいれば負けた訳じゃない。生きてさえいれば惨事を未然に防ぐことも可能になる。

「ありがとう、遠坂。——っ、ちょっと待て。どうもさつきから変な違和感を感じてたんだが、おまえ、いつのまに俺を名前で呼び捨てるようになってんだよ」

「あれ？ 意識してなかったけど……怒りで些細なことは吹っ飛んじゃったのかしらね。イヤなの？ 名前で呼ばれるの？」

「……別に嫌じゃないけど。まあ、遠坂の呼びやすい方で構わない」
「そ。なら、これから“士郎”って呼ぶわね」

わざわざそこを強調する遠坂。本当に猫被ってやがったんだな、このあくまめ。

「で、これからどうするつもりなの、士郎？」

「ん、そうだな……」

遠坂の言うこれからが何を指しているのか判らない。今からのことか、明日からのことが、それとも――

しばらくは空に流れる雲を眺めて色々と考えて見た。だけど結局は何の考えも纏まらず時間だけが過ぎていく。俺一人の情報量と知識じゃすぐに限界がくる。

ふと、遠坂は何をしているのだろうと視線を落としてみた。
どうやら彼女も何か考え込んでいる風で、顎に手を当てて思案顔だ。

俺は学校にマスターがいるなんて考えもしなかった。
人が大勢いるから安全だとさえ思っていた。それこそが大きな勘違いだったのだが。

学校に結界を張るようなヤツがまともなヤツな訳はない。関係ない――そう、関係ない“一般人”を巻き込むなんて俺には考えられないし、絶対に許しておけない。

学園には藤ねえや桜だっているんだ。

『――結界が発動したら、地獄に変わるでしょうね』

遠坂の言葉が頭を巡る。

そんなこと、絶対に許すもんか。

俺は止めたい。いや、何としても、その結界を張ったマスターを止めてやる。

例え————相手を……

「ねえ、士郎」

そこまで思索した時、ちょうど遠坂が声をかけてきた。纏めかけた考えは一旦放り投げて、改めて彼女に向き合う。

「何だ、遠坂？」

「あのね、私達は敵同士だけど……一時休戦にしない？ ほら、学校にマスターはいるしバーサーカーは手強いわ。そうね、学校にいるマスターを排除して、バーサーカーを倒すくらいまでは手を組むってことでどう？」

「そりゃ願ってもない話した、遠坂っ！ こっちからお願いしたいくらいだ」

「ちよっ、即答？ 少しは考えてから話さないよ」

「なんでさ？ 俺、遠坂と争うつもりはないって言ったぞ？」
「……………」

眉根を寄せてなぜか俺を睨んでくる遠坂。

それからちよっとそわそわしたかと思えば、急にそっぽを向いて、最後には何やらぶつぶつ呟き出した。

（もう……これじゃ色々悩んだ私が馬鹿みたいじゃないの……。ホント、士郎って……………）

ころころと表情が変わっていく。実に見ていて飽きない奴だ。

「何よ、ニヤニヤして?」

どうやら思わずにやけていたようだ。

俺はその表情を遠坂から隠そうと踵を返す。

「何処行くのよ、士郎?」

「授業を受けに行くに決まってるじゃないか。もう、始まってぞ」

少しだけ迷ったようだが、遠坂は笑顔でこう付け加える。

「一限くらいはサボってもいいんじゃない?」

「あのな……それ、とても優等生の発言とは思えないぞ」

「別に良いじゃない。私だってたまにはそんな気分になるのよ」

結局、遠坂のそんな気分に従って一限の休み時間までこうして二人で屋上に佇んでいた。

季節は冬。

風は冷たかったが、どうしてか、あんまり気にはならなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3492ba/>

Fate/stay night ~ その時聖杯に願うこと

2012年1月13日00時53分発行